

華の下にて
春にて

十才

序

いつか桜の花を見ながら死んだ事がある。桜を見上げながら毎年そう思う。

『・・・華の下にて春死なむ この如月の望月の頃』

花曇りの空に、溶け入るように咲く桜。

チッチッチとスズメ達が狂ったように啼きながら、何かに取り憑かれた様に花の付いた枝をくわえては千切り、また違う花をくわえては千切る。

桜のはらむ狂気、我が内に満ちる。

空を見上げながらそのまま後ろに引き倒される感覚に捕らわれ、座り込む。それでもまた花を見上げる。

神と鬼の舞。ハラハラと風に舞う花びらにそれを思う。

目を閉じ、すべての感情を押さえ込む。

花びらの舞う音が聞こえた。閉じた目に、雪のように華を降らす桜の老木が写る。

その華に埋もれ、朽ちてゆく。

意識を古木に寄り添わせながら、朽ちる我が身を見続ける。

蛆が湧き、肉が溶け、髪がズルズルと落ち、時が経ち、纏っていた衣が朽ち、秋風に飛ばされる。そして更に時を経て白い髑髏が残った。

髪？

僧ではないのか？

思いは？

悔いはあるのか？

悲しみは？

恨みは？

否。

ならば満足感は？

それも否。

髑髏となってもまだ、眼球を失った眼窩を華に向けて横たわる。

そうして何度華を見たのだろう？

骨が砕け散るまで何度春を迎えたのだろう？

華を愛した。

華だけを・・・。

故に華と変化す。

「めぐみ、桜の開花予想が出たよ。今年の大阪は四月二日だって」

家で夕食の用意をしている時に、元夫、今はただの同棲相手である吉野聡二郎がテレビを見ながら言った。

「じゃあ、それから一週間後が見頃ね」

私はシチューの鍋を掻き混ぜながら言う。

桜は毎年咲く。私が生きている時も死んでいる時も。

「後三週間か。待ち遠しいな」聡二郎が言った。

「そうね」私はそう答えて、サラダの用意をする。

私は、凡そ一月程前、梅の花の下で奇妙な世界に引きずり込まれた。そして、二週間前には正巳が北海道の土産にホワイトチョコレートを持って尋ねて来た。

「めぐみさん。先日は本当にありがとう御座いました。篠田さんもめぐみさんの事を心配されてましたよ」私のオフィスでコーヒーを飲みながら正巳がそう言った。

篠田登、北海道のチャネラーだ。春樹が生きていた時に私と会わせ、チャネリングをして貰った事がある。春樹に言わせると一番波動の細かいチャネラーだ。

「めぐみさんは元気ですって伝えたら、本当に喜んでられました」正巳が続けた。

「彼もきっと春樹が逝ってしまう事を知ってたんでしょうね」私が言う。

「多分。あの後何度もチャネリングの録音を聞き直したって言うておられましたから」

「そうね。あなたもあれ、聞いたの？」

「はい。普通はプライバシーの保護のため駄目なんですけど、特別にお願いして聞かせて貰って来ました。とても興味深いチャネリングでしたね。篠田さんはめぐみさんの事、本当に強い人だって言うてられましたよ」

「とんでもないわ。私、この部屋で一人で三日間泣き続けたのよ。床をはいずり回って、何も食べられずに、泣いては眠り、起きては泣いた。それで最後には頭が変になって笑い出しちゃったの。あの時友人が来てくれなかったら、私も春樹と同じ世界の住人になってた。あの時はそれを望んではいたんだと思うけど。でも、まだ向こうへ行くだけの用意が出来てなかったのね。それでそのまま入院したの。その時霊体になったあいつが呼び方と落とし方を教えてくれた」

「それで梶さんにあんなに文句を言うてたんだ」正巳が笑いながらそう言った。

「そうよ。あいつは基本的に自分勝手に酷い男なの」私も笑いながらそう言う。

「でも、良い男なんでしょう？」正巳がからかうように言う。

「そうよ」私は大きく頷いて見せた。

「かなわないな・・・」正巳がそう言って少し膨れて見せる。

「それでお仕事は順調？」

「ええ。お陰様で。まだまだ梶さんには及びませんが、何とかやれそうです」

「それは良かったわ。暫くは大阪？」

「いえ、今度は三日後に福岡です。その後そのまま広島でセミナー」

「大変ね」

「じっとしてるより、動いてる方が仕事してるって感じで良いんです」

「まだ、若いものね」

「はい。体力はありますから」

正巳も初めて会った時に比べると少し明るく、遅くなったようだ。

「めぐみさんのお陰ですよ」

春樹がそうであったように、正巳も私の心の内が判る。

「便利なのか、不便なのか・・・」私が言う。

正巳は素敵に笑って見せると言った。「一人前に成ったらお願いしますね」

「呆れた。早く恋人を作りなさい」

「おばさんみたいな事、言わないで下さいよ」

「おばさんで悪う御座いましたね」私はそう言ってすねて見せた。

「人見知りのめぐみさんも大分僕に慣れましたね」正巳が生意気に言う。

「おかげさまで」私はそう言って笑って見せた。

そんな話をして、正巳は帰って行った。

あれから二週間。正巳は大阪に戻ったのだろうか？

「めぐみ。今年は何処へ花見に行く？」元夫が言った。

「出雲へ行きたいわ」私は何気なくそう言ってしまった。

出雲の桜。春樹と一緒に見る約束だった。

「僕と行っても良いの？」

「どうして？」私は動揺を隠して言う。

「梶君と行きたいんじゃないかって思って」

「春樹は死んだのよ」私が言う。

「君の中ではちゃんと生きてるよ」

「そんな訳無いじゃない」私はそう言って出来上がったサラダをテーブルに乗せる。

「良かったら僕と行こうよ」元夫が立ち上がって食卓につく。

「かまわないわよ。私が旅館の手配をしましょうか？」

「いや、僕がするよ。何処が良い？」

「いつものところで良いわ」

「じゃあ、玉造温泉だね」

「そうして」春樹と行った海潮温泉に泊まるのは気が引けた。

私はどこまでこの人の良い男を傷つけるのだろうか？自分でも恐ろしくなる。春樹が正巳や私自身に降りて活動している事も彼には話した。だから彼は春樹が活着ていると言ったのだ。私はこの吉野聡二郎と言う男に何故こんなに甘えているのだろうか？

しかし私はこの男を愛している。死んだ春樹と同じだけ。

春樹に嘘が付けなかったように、私にはこの聡二郎と言う男にも嘘をつく事が出来ないのだ。きっと彼は、春樹のようにそれを口に出しはしなくても、私の心の内まで見通しているのだろう。私もそれを本能的に理解している。だから、いつもありのままを話してしまう。そして、梅の香りに包まれながら話した時に、私が意図的に言わなかった事も、聡二郎はきっと理解しているのだ。

「さあ、食べましょう」私はそう言って彼の前にシチューの皿を置く。

彼はスプーンを取ってそれを口に入れると言った。「旨いよ」

「ありがとう」私もそう言ってそれを食べ始めた。

その後三日間私はオフィスに泊まり込んで仕事をした。それを納品してしまえばしばらくはゆっくり出来る。

納品の帰りに、百貨店で桜色のカップとキャラメルティーを買った

部屋に戻った私は、久しぶりにオフィスの模様替えをした。ソファのカバーや、クッションのカバーを柔らかな草色の木綿に変える。部屋の中にも春が来たようだ。

一人でソファに腰掛けて桜色のカップでキャラメルティーを飲みながら、華が待ち遠しいと言った元夫の事を思った。

吉野聡二郎、二十五歳の時に結婚した相手。生地を扱う商社に努めている。今はそこの課長。彼は私より一つ年上だ。私がアパレルメーカーに努めていた時に知り合い、三年間交際して結婚した。確かに出会った時から親密な感じのする男だった。

結婚生活は十五年とちょっと。私が高校時代の弟兼恋人代理の春樹と再会して、激しい恋に落ち、そして春樹の死をきっかけに離婚した。聡二郎は私の恋を怒った訳では無かった。怒りで自分を癒すような人間では無かったのだ。春樹の死後、彼は、もう一度恋人からやり直そうと言って離婚届を出した。本当の私を愛したいのだとも言った。私にはその申し出を断る理由も権利も無かった。

結婚する前からを合わせると、今度の春で十九回目の春と一緒に迎える事になる。いつも恒例のように二人で花見に出掛ける。彼も、私も花は好きだ。それも木に咲く花が特に。

お互い束縛される事を望まなかった。それで子供を作らなかつたのかも知れない。それよりも、普通の夫婦生活自体を望んでいない結婚だったのだ。しかし、私は彼を愛していたし、彼も私を愛していた。お互いの存在を必要としていた。ただ、その必要の仕方が、性生活を営み、子供を産み、育てると言った、一般的な夫婦の形では無かったと言うだけの事だ。

それも認めてしまうしか無かった。魂に何一つ問題は無い。私は、いや、私達は何も間違えた訳ではなく、必要があつて結婚し、必要があつて離婚した。

では、どんな結果にとって今の状況が一番良い状況なのだろうか？きっと答えは向こうからやって来る。それを待てば良い。

『姉さん。それを知りたいか？』気を抜くと突然やって来る春樹の意志だ。

私は一人で首を横に振る。『知りたくないわ』

『知りたければ簡単に判るよ』

『そうね。その力もあなたがくれたのよね。でも、それを知ったからって別に何も変わらないんでしょう？私にとって彼が必要であるって言う事には変わらないんだし、まだ二人で何かをする為に一緒に居る訳なんだから』

『それで良い。俺もそうしていればもっと長生き出来たのに・・・』

『珍しい。あなたが反省？』

『いや、そうじゃないさ。せつかく姉さんを手に入れたのに、旦那に返すのが勿体なかったなって思うだけ』

『相変わらずね。でも、それって真理なんでしょ？』

『何が？』

『また、とぼけて。あなたは、あなたがこっちの世界ですべき事が終わったからそっちへ移行

した。そのすべき事を加速させるためにあなたは、あの不思議な力を使った』

『そう言う事。だって俺にはその方法しか無かったんだ。だから何も間違った訳じゃない。完璧な人生だった。しかし、姉さんは違う事にその力を使える。だから姉さんにその力を預けた』

『それは、どうもありがとう。ところで、正巳はうまくやってるの？』

『今のところな。でも、もうすぐまた姉さんの出番だ』

『勝手に決めないでよ』

『諦めろ。楽しい事が待ってるんだ』

『人生諦めが肝心って事？』

『そんなとこだ。ところで出雲の桜、見に行けそうだな』

『そうみたいね。あなたはついて来るの？』

『姉さんが呼んでくれたらな』

『今日は呼んでないわよ』

『いや、姉さんがこの話を聞いたかったから俺は来たんだぜ』

『そう言う事か。私に降りる時には、名前の呪術は必要ないんだ』

『そうだよ。必要な時に、話し出すだけ。俺は姉さんのエネルギーで作られた幻。つまり龍と一緒にだ。正直言ってこんなに簡単だとは俺も思ってなかったよ。霊媒を使う時だけ名前を使えば良い』

『大分慣れて来たわね』

『ああ、お互いにな』

私は心の中で会話をしていた。それは意志の疎通に関しては春樹がそこにいるのと何一つ変わらなかった。そう言えば、彼が死んでから、彼が帰った後に残っていた彼のエネルギーの場だけが感じられなくなっていた。

『俺がいつも姉さんの中に居るからだよ』春樹がそれに答えた。

『つまり、あなたのエネルギーが無いからじゃなくて、別れて無いから何ものこらないって言う事か・・・』

『そうさ。五十嵐は二つ重なって居るって言ってただろう？でも、今は溶け合ってるからそれも見えないだろうな』

『不便じゃない？』

『大丈夫だ。五十嵐と会話する時には、俺のエネルギーを独立させるさ』

『いろいろ出来るのね』

『姉さんのエネルギーの場がとても大きいから出来るんだ。姉さんのエネルギーは、使っても使っても減らない。確かに、前に姉さんが言ったように、自分自身で発電しているんだ。使った分だけちゃんと補充される』

『ねえねえ、それって私に寄生してるの？』

『嫌な言い方だな。元々同じものだって知ってるだろう？』

『そうだったわね。ちょっと意地悪すぎたわね』

『欲求不満なんだろう。誰かに抱いてもらえよ』

『仕返しにしては酷すぎない？』

『五十嵐を呼べば俺が抱いてやるよ』

『調子に乗って。春樹、もう帰りなさい』

私は会話をやめてもう一杯キャラメルティーを飲む。

『姉さん、これ、旨いな』

『帰れって言ったのに』

『良いじゃないか。名前と呼ばれた訳じゃないから、名前では落ちないよ。姉さんが俺を必要としなくなれば自然に居なくなる』

『つまり私が欲求不満だからいけないって言うの？』

『認めれば？別に恥ずかしい事でも無いし』

『判ったわ。今夜家に帰って彼に抱いてもらう』

『それも良い方法だ。ちょっと悔しいけどな。そうやって自分に正直になる事が大切なんだ。俺は姉さんの一部なんだから、何も恥ずかしがることも無いし、何も隠せないよ。それに、俺は姉さんのどんなところを見ても姉さんを嫌いになったりもしない。だから自分の欲求を全部認めてしまえ』

『私が誰かを殺したいって思っても、あなたは私を嫌いになったりしないの？』

『当たり前だろう。俺は姉さんの一部だ。姉さんがそんなに人を恨むのなら、俺もそいつを恨むだけだ。でも、今の姉さんにそれは出来ないだろうな・・・』

『あなたのせいよ』

『そうかも知れない。でも、結局はその道を姉さんが選んだんだ』

『分かってるわ。でも、誰かを憎む程人を愛するって言う感覚って素敵だと思わない』

『本人は辛いけどな』

『そうか、あなたはずっとそれを持って生まれ変わったのか』

『まあな。でも、確かに楽しかったぜ。それで結局ねえさんを手に入れたし』

『確かに完璧な人生ね』

『そう言う事』

『ありがとう。なんだか気持ちが軽くなったわ』

『それは良かった』

『じゃあ、私、お昼寝するわ。あなたの夢を見られると良いけど・・・』

私は飲んでいたカップを片付けて、毛布を出してソファに寝転ぶ。

「お休みなさい」声に出してそう言って目を閉じた。

電話のベルで目が覚めた。

「もしもし」私が言う。

「めぐみ、寝てただろう？」、元夫の声だ。

「どうして分かるの？」

「そんな声だよ。仕事は終わったかい？」

「ええ、朝一番で納品して、お買い物をしてから帰ったの。昨夜、ほとんど徹夜だったからお昼寝中」

「じゃあ、今夜は帰るね。出雲の予約取れたよ」

「ありがとう。帰るつもりはしてる。でも、疲れてるの。ご飯は作りたくないな」

「だったら、外で食べよう。僕の仕事が終わったら、迎えに行くよ。それまでゆっくり寝てると良い」

「良かった。じゃあ、待ってるわ」私はそう言って電話を切った。そして、また毛布を被って眠りに入る。

正巳の夢を見ていた。彼が小さな子供の頃だった。

深い山の中。季節は冬の終わり。空には切った爪のような細い鋭い月が出ている。回りに残った雪がそれを反射してうっすらと青い空間を作りだしていた。

小さな正巳は、明かりも無い掘っ建て小屋の暗闇の中で、たった一人何かの呪文をぶつぶつと唱えている。

「オン アボギャ ベイロシャノウ マカボダラ マニハンドマジンバラハラバリタヤウン オン アボギャ ベイロシャノウ マカボダラ・・・・・・・・・・・・・・・・」 それは果てしなく続く。光明真言。彼は闇の中で光りの呪文を唱え続けていた。

私の意識はその彼にそっと寄り添った。

「おばさん誰？」正巳が真言を中断し、子供らしい可愛い声で言った。

「あなたの知らない人よ」私はうろたえてそう答える。何故なら私はその時、姿を持っていたかったからだ。

「ふーん」正巳はそう言った。

「あなたのお名前は？」私が尋ねる。

「僕、佐治正巳って言うんだ。でも、学校へ行くようになったら五十嵐正巳って言わなきゃいけないの」

「いくつなの？」

「六才」

「じゃあ、桜が咲いたら学校ね。ところでこんな暗い所で何してるの？」

「修行だよ。師匠に言われたの」

「暗くて寒いし、怖くないの？」外には雪が残っているのに、彼は白い木綿の衣をまとっているだけだった。

「寒いのは平気だよ。慣れてるから。でも、怖いから真言を唱えてるんだ。これを唱えると魔物が寄って来ないんだ」自慢げに正巳が言った。

「魔物って？」

「おばさん知らないの？一杯いるんだよ。僕の事連れて行こうって狙ってるんだ。それで師匠が僕にここから出ないで修行するようになって言ったんだ。でも、おばさんは何故ここに居るの？」

「おばさんは魔物なのかな？」私が言う。

「違うよ。魔物はね、人間じゃないんだ。でも、おばさんは人間だろう？」

「正巳には見えるの？」

「見えるよ。普通の人とはちょっと違うみたいだけど、でも、人間の形をしてるもん」

「そう。おばさんは形が無いのかと思ってたわ」

「そうじゃないよ。だって僕には見えるよ。きっと師匠にも見えると思う」

「修行の邪魔しちゃ師匠に叱られるかもしれないわね」

「見つかったらきっとね。師匠ってすごく怖いんだよ。でも、大丈夫。きっと見つからないから」

「どうして？」

「だって今ここにいるのは僕だけだもん。師匠は遠くまで祈祷の仕事で行っちゃったんだ。だから帰って来るまでずっとここに籠もってないといけないの」

「外に出ちゃ駄目なの？」

「魔物が僕を狙ってるから。僕を食べようとしてるんだ」

「師匠が居る時は大丈夫なの？」

「うん。師匠が守ってくれるし、それに師匠が居れば魔物も寄って来れないんだ」

「そうなんだ。でも、まだ小さいのに一人でお留守番なんて偉いのね」

「そんなの平気だよ。僕、早く一人前に成りたいんだ。それでお母さんとここに帰るの」

「そう、お母さんの事好き？」

「うん、僕は好き。でも、母さんは僕の事嫌いなんだ。だから師匠に僕をあげちゃったの。でもね、僕が普通の子になればきっと母さんも僕の事好きになってくれると思うんだ」

「そう。でも、おばさんは今のままの正巳君でも、お母さんは好きだって思うな。きっと色んな事情があったんだよ。だって正巳君可愛いもの。嫌いになる訳無いよ」

「そうかなあ？」

「きっとそうよ。それより師匠はどのくらい居ないの？」

「もう一週間。後一週間ぐらいは帰って来ないと思う。だっていつもそうだから」

「食べるものはどうしてるの？お風呂や、着替えは？」

「明るいうちに師匠が木の実を置いて行ってくれたのをここで食べるんだ。明るいうちだったら魔物も来ないから。後、水もちゃんと汲んであるし。それで体を拭いたりする。僕が川から汲んで来たんだよ」

「偉いのね。重かったでしょう？」

「平気だよ。何度も何度も汲みに行くんだ。それに僕は今、木の実しか食べちゃいけないの」

「修行なの？」

「そうだよ。学校へ行くようになったら出来ない修行だから、今のうちに終わらせるんだって師匠が言ってた」

「でも、おなかすくでしょう？」

「平気さ。その時のための呪文だってちゃんと覚えてるもん。僕、何でも出来るんだよ」

辛いほどいじらしかった。この六歳の正巳はなんとかして愛されようと、六歳なりに精一杯生きているのだ。

「おばさんと一緒に来ない？」そんな事が出来るのかどうか判らなかったが、彼のいじらしさが私にそう言わせた。

「駄目だよ。おばさんと一緒に行っちゃったら僕、帰れなくなるもん」

「どうして？」

「だって、おばさんは今の人じゃない。おばさんはずっと後の人なんだ」

「なんでそう思うの？」

「僕知ってるんだ。おばさんは人間だけど、今ここに居る人間じゃないんだって。えっとね、おばさんの回りの光はね、堇のお花の色と同じなんだ。この間ね、あばさんと同じ色の光のおじさんがやって来て、教えてくれたから覚えてるんだ」

「そう。どんなおじさんだった？」

「色んなこと教えてくれたよ。とっても優しいおじさん。名前は春樹って言うんだよ。春に伸びる木なんだって言ってた。寒い時はじっと縮こまってて、春になったら、一気に伸びるんだって。格好いいね」

「そう、春樹も来たの」

「おばさんの知り合い？」

「ちょっとしたね」

「僕、あのおじさん好きだな。すごく格好いいし、強いし、優しいんだ。僕に色んな術を見せてくれたんだよ。あんな風に成れたら、きっと僕の事、母さんも好きになってくれるよね」

「大丈夫。正巳君はとっても素敵な大人に成れるわ。それに、本当に今のままだもお母さんは正

巳君が大好きよ」

「ピーンポーン」

玄関のチャイムの音で目覚めた。私はゆっくり起き上がり、首を振って正巳の夢を追い出す。

「はい」インターフォンを取って答える。

「めぐみ、下で待ってるから降りておいで」元夫だった。

「分かった」私はインターフォンを切って急いで用意して部屋を出た。

エレベーターを降りて外を見ると、元夫がレモンイエローの新しい形のワーゲンビートルにもたれて私を待っていた。右肩を少し下げ、背中を車に少しもたれさせ、俯き加減に立っている。そして、照れたように少し手を挙げて合図する。

それは春樹と同じ姿。しかし、私はすぐにそれが元夫であるのが判った。つまり、私が意識しなかっただけで、今まで元夫もそうして立っていたのだ。

「ごめんなさい。まだ寝てたから」私はそう言って彼の元に行く。

「どう？この車。今日納車されたんだ。それでめぐみに見せようと思って」

彼は結婚する前から、ずっと古い型のワーゲンビートルを、何度か乗り換えはしたが、大切に乘っていた。

「素敵じゃない」私が言う。

「そうだろう？ちょっと雰囲気が違うけど、もうそろそろ前のも修理が効かなくなってたし。思い切って買い替えたんだ」

「色が素敵。あなたにしては派手目の色を選んだのね」

「ああ。元気の出る色だろう？それにそろそろ派手にしても良い年になって来たし」

彼はいつもシックな色を好んでいた。車の色だけではなく、彼の選ぶものはほとんどが落ち着いた色合いであったり、安定感のあるデザインであったりする。

「離婚して心境の変化があったのかしら？」

「そうかも知れないよ。恋をするにはエネルギーが必要だからね。さあ乗って」彼はそう言ってドアを開けた。私はそれに乗り込む。新しい車特有の匂いがした。私はそれが嫌ではない。基本的に新しいものが好きなのだ。

元夫も車の前を回り込んで運転席に乗り込み、エンジンを駆けた。

「エンジン音も随分静かになったわね」私が言う。

「ああ。見た目は若返って派手目だけど、乗り心地は前よりも落ち着いたよ」

「年相応ね」私はそう言って笑って見せた。

彼が車を出そうとしたその時、私の目の端に男の影が映った。

「あっ、あなたちょっと待って」私はそう言って彼を止めると車を降りる。そして、その男の方へ近づく。それは正巳だった。

「今頃どうしたの？」正巳に声をかけた。

「すみません。今からどこかへお出掛けだったんですね」正巳が言う。

「いいえ、今から家に帰るのよ。彼、元夫」そう言って車の方を指し示す。

元夫が車を降りて、傍に来た。私は元夫に正巳を紹介する。

「メモリーコーポレーションの社長の五十嵐正巳君よ」

「初めまして。いつもめぐみさんにはお世話になってます」正巳は少し緊張した様子でそう言った。

「こちらこそ、めぐみにご迷惑かけてます。私は吉野聡二郎。めぐみの元夫。今はただの同棲相手ですよ」そう言って笑って見せる。

「何か用があったのかしら？」私は正巳に問う。

「いえ、また出直します」正巳が言った。

「もし良かったら、一緒に食事でもどうですか？彼女が今日は食事の用意が面倒だって言うんで、僕達も食事して帰るつもりだったんだ」

「そうね。正巳も一緒にどう？」私も彼を誘う。

正巳は少し考えてから言った。

「いえ、やっぱり止めておきます。ご迷惑をお掛けするかも知れませんから」

聡二郎は、正巳の顔をじっと見ていた。そして、その後私の顔をじっと見る。

「判った。僕が一人で帰るよ。めぐみは五十嵐君の相談に乗ってあげた方が良い」

「いえ、そんな。僕が突然来ちゃったからいけないんです」正巳が恐縮して言う。

「かまわないよ。めぐみはもう僕の妻じゃないんだ。独占出来るなんて思っていないさ。それより、五十嵐君は今日とてもめぐみを必要としてる。それに対してめぐみは何か出来るみたいだ。ねえめぐみ」彼はそう言って私に笑って見せた。

「判らないわよ。私に何が出来るかなんて」私は少し膨れて見せる。

「そんな風に言わないの。相談に乗って上げると良いよ。じゃあ、僕は帰るから」そう言って聡二郎は複雑な表情で立ちすくむ正巳に微笑んで頷くと、新しい車に乗って帰って行った。

「めぐみさん、すみません。これで良かったんですか？」正巳が本当にすまなさそうに言った。

「さあ？でも、彼、言い出したら聞かないところがあるし。勝手に帰っちゃったんだから良いんじゃない？」

「本当にすみません」正巳はもう一度謝った。

「ところで、何かあったのかしら？」

「実は父がいなくなったんです」

「お父様が？」

「はい」

「確かに面倒な事みたいね。とにかく食事をしましょうよ。私おなかがすいてるの」

私達は正巳の車で、近くのファミリーレストランへ行った。ゆっくりと食事を楽しむ雰囲気では無さそうなので手っ取り早くお腹が満たせるところを選んだのだ。

食べ終わってすぐに私の部屋に戻り、正巳が言った。

「父が消息を絶って、一月になります。父は、普段は丹波の山奥で一人で行をしながら暮らしているんですが、依頼があると祈祷やお祓いの為に出掛けます。ちょうど一月前に僕が会いに行った時に、これから四国まで祈祷に行くって言ってたんです。その後、何度連絡を取ろうとしても取れない。今日それで家の方へ行ってみたんですが、最後にあった時のままで帰ってないみたいなんです」

「一月って長い方なの？」

「はい。大体二週間で戻ります」

「帰ってすぐに次の仕事に出掛けるって言うことはないの？」

「ありません。父の場合、一度仕事をしたら、充電のために一月は行をしないといけないんです」

「なるほど。じゃあ、絶対に家にいないといけない時期なんだ」

「はい」

「あなたの力で何か判らないの？」

「残念ながら。父のエネルギーを捕らえる事が出来ないんです」正巳はそう言って首を振る。

「困ったわね。で、私に何が出来るのかしら？」

「判りません。でも、めぐみさんにしか相談出来ないものですから」

「そう。春樹はなんて言ってるの？」

正巳はもう一度首を振ってそれに答える。「多分駄目だろうって感じです」

「駄目って、どう言う事？」

「父は失敗したんだと思います。多分肉体はもう死んでる。そして魂が止まってる」

「何、それって最悪の状態って言う事？」

「多分、そうだと思います」

私は大きくため息をついて言う。「春樹、正巳に降りて来て」

正巳はその言葉を受けて、暫く体の力を抜いた。

『姉さん駄目だ。五十嵐に降りられない。五十嵐を呼び戻せ』春樹の意志が私の中でそう言った。それを受けて私はもう一度言う。

「正巳。戻って」

正巳はいつもより長い時間を掛けて力を戻した。両手で顔を押さえて頬を二、三度叩く。そして、とても情けない顔をして私を見た。

「すみません」泣きそうな声で言った。

「しっかりしなさい」私はそう言って立ち上がり、彼の横に座って彼の肩を抱き寄せる。

エネルギーが不足しているのを感じた。彼を取り巻いている空気の膜のようなものが、冷たく冷え切っているのだ。

「正巳。あなたは大丈夫よ。ちゃんとお父様を見つけられるわ」

「でも、父は、もう戻れない。僕もきっとあんな風に成ってしまうんだ」絶望的な声で言った。

「恐れなくて。それ以上あなたの恐怖が大きくなると、あなたも凍りついてしまう」

「梶さん、助けて。僕はもう何も出来ない。梶さんみたいに成れないんだ」正巳がそう言って自分の顔を掻き毟るようにして泣きだした。必死に押さえ付けていたものが溢れ出したと言う感じだった。

私はそんな彼を抱き締める。正巳は父親の事よりも、自分が同じように成ってしまう事を恐れているのが判った。それは彼のような力を持つ者にとって死よりも恐ろしい状態。そして、それを知るだけで魂が凍り付き始める程の恐怖。

『春樹、どうすれば良いの？』私が春樹に問う。

『俺達には愛してやる事しか出来ない。五十嵐は自分の力で乗り越えるしかないんだ』春樹がそう答えた。

『急がないと正巳が凍っちゃう』私は正巳を抱く腕に力を込めてそう言う。

『俺には何も出来ないんだ。姉さん頼むよ』春樹がそう言った。

私は正巳にエネルギーを送り続ける。夢で見た六歳の正巳のように彼を抱き締める。正巳の体が小刻みに震える。彼は私のエネルギーを受け取れないで拒絶反応を起こしているのだ。私は彼

の前に屈み込んで正巳の顔をのぞき込む。彼は目をしっかりと閉じている。

「正巳、ほら、ちゃんと目を開けて。あなたの前にいるのは誰？」

「めぐみさん」正巳が消え入るような声で言った。

「私の中にいるのは誰？」正巳はまた目を閉じて震える。

私が続ける。「オン アボギギャ ベイロシャノウ マカボダラ マニハンドマジンバラ ハラバリタヤ ウン 佐治正巳君。ほら、目を閉じちゃ駄目。ちゃんとおばさんを見るの。董色に光ってなんかないでしょう？おばさんは今あなたの傍に居るのよ。覚えてる？」

「光明真言。董色？董色のおじさんとおばさん。名前は春樹。そうだ、あのおじさんは春樹って言った。梶さんだったんだ・・・。おばさんは、僕と一緒にいこうって言った」

正巳のエネルギーの波が変わった。それは六歳の時の彼の波長。

「そうよ。一緒にいこうって言ったのよ。もう、同じ時の中にいるんだから、一緒にいけるのよ。あなたは一人じゃないの。佐治正巳君はとってもしっかりした良い子だったじゃないの」私はそう言って彼の頭を撫でる。

「どうして？めぐみさんが僕の記憶にいるの？それを僕はどうして今まで思い出さなかったんだろう？梶さんの事も・・・」正巳は混乱していた。

「時は順序良く流れている訳じゃないのよ。あなたはあなたが必要なものをすべて持ってる。あなたの記憶に董色のおじさんとおばさんが居るって言う事は、それがあなたにとって必要な二人だからよ。ほら、そんなに怖がらないで、あなたがそんなだと、お父様を探しにも行けないわ」

「めぐみさんは一緒にいってくれるんですか？」正巳のエネルギーが戻ってきた。

「おばさんと一緒にいこうって言ったでしょう？」

「めぐみさんはおばさんじゃないですよ」

「六歳のあなたにはそう見えた。下手をすればおばあちゃんに見えたかもしれないわ」

「僕、父を見つけた時、自分がどう成るのが分からないんです」また少しエネルギーが弱まる。とても、不安定だ。

「自信が無いのね」

「僕の中の恐怖が僕を食っちゃっうんじないかって・・・」魔物に脅えていた六歳の正巳と同じだ。

「六歳の正巳君は、魔物に食われないように光明真言を唱えてた。真っ暗な闇の中で、一心不乱に光の真言を唱え続けてたのよ。一人前に成ったらお母さんに愛されるって思って。いじらしかったな。それでおばさんといこうって言ったの。でも、あなたはもう一人前。るみさんがあなたを愛している事を知ってるでしょう？そして、あなたは春樹にも愛された。あなたには理解出来ないかも知れないけど、私だってあなたを愛しているのよ。あなたは十分に光りに包まれたの。今度はあなたが光を発しなくちゃいけないんだと思う。私には何も分からないけど、私の理屈で行くとそうなるのよ。あなたが光る。それはあなたが愛するって言う事。あなたにとっては充分だと思えないかも知れないけど、愛されたの。それを認めてしまって。あなたは確かに愛された。あなたは既に光りに包まれてるの。だから、その光と同じものを自分の中で作り出す事も出来る。そうすれば何も怖くない。あなたの魔物はもう何の力も持ってないのよ。誰にも守られなくても、もう魔物はやって来ないの」

「僕には梶さんみたいに愛する人が居ない」彼を絶望の冷たさが覆っている。

「春樹は私を愛したんじゃない。自分自身を深く愛したの。深く深く自分を愛する事で、自分のしたい事、すべき事を見つけた。それだけなのよ。そして私も同じ。自分自身を愛する事を春樹に教えて貰ったから今の私が此処にある。彼が私を愛しているのと、私が彼を愛しているのは関

係のない事なの。これは経験しないと分からないかな？」

「めぐみさんは梶さんにあんなに深く愛されてるのに？」

「あれは私が作り出した幻。私の中にあるもので作られてるのよ」

「梶さんが幻？」

「そう。生きていた時も、今も。あなたにとっての春樹もあなたの中にあるもので作った幻」

「僕には分かりません。さっきめぐみさんは僕は愛されたって言った。そして、今、それは幻だ
って・・・」

「矛盾してる？」

「そうじゃないですか？」

「あなた自身も幻なの。大きな魂が色んな部分に別れて幻として存在している。そして、魂とあ
なたが私に見たエネルギー。それを理解する必要があるわね」

私はそう言ってから、彼を離れ立ち上がる。そして部屋の明かりを消して、少し離れて彼の前
に立つ。

目を閉じて拍手を打つ。それは私にとって三度目の入神。神のエネルギーを我が身に移す方法
。打つ手の音に乗せて、すべてを取り払って行く。思いの無い状態。

「あがかむえみため ももやそかむたち あによりため もとつちへつち あいわう あいわう
」無意識に神を称える言葉を唱え、さらに拍手を打つ。神と繋がる窓が開き、そこからエネルギ
ーが流れ出す。私の体がそれを受け、宙を舞う。

それまでの入神と違って、その後私はすぐに自分に戻る事が出来た。私が慣れて来た事と、深
く入る必要が無かったからだろう。

「どうだった？」私が正巳に尋ねる。

「確かに神でした」正巳が答えた。

「どんな神だと思った？」

「とても大きな力なのに何も無かった。この前の時は愛があったのに・・・」

「そうでしょう？これが神のエネルギーなの。何も無いの。つまり、どんなものにでも成り得る
って言う事でもある。その時に必要なものに変化するの。それが幻の正体よ」

「神の幻？魂も幻？ちょっと待って下さい。僕の中にあるものが根本から覆ってしまいそうです
。僕に少し時間を下さい」

私は正巳に触れ、彼のエネルギーが暖まって来たのを確認してそれに答える。

「良いわよ。ゆっくり時間をかけると良いわ。時は必要なだけ用意されてるの」私はそう言っ
て笑って見せた。

「めぐみさん、今夜はどうされます？」元に戻った正巳が言った。

「今からだったらまだ帰れるから、帰ろうかしら？」私は元夫の顔を思い浮かべながら言った。

「だったら、僕、送って行きます。旦那さんにお礼を言わないといけないし。これからの事お願
いもしないと・・・」

「何を願うするって言うの？」

「めぐみさんをお借りする事ですよ」

「私、彼の所有物じゃ無いわよ」

「あれっ、めぐみさん知らないんですか？」

「何を？」

「旦那さん、梶さんと同じ力を持ってられますよ。梶さんが完璧に押さえていた時と同じ波動

です。さっきこの下で話してるのを見て、僕本当にびっくりしたんですから。梶さんがもう形を持ったのかって思って」

「そう。でも、彼にはその事言わないでね。春樹が二人になったら面倒だから」

「面倒ですか？」

「ええ、とつてもね」私はそう言って笑って見せた。

やはり荒魂和魂なのだ。そして元夫はこの生でその力を利用しないで生きる事を選択しただけだ。

私はなんて貪欲なんだろう？どこまで彼に愛される事を望んでいるのだろうか？

でも、まあ良いか。

彼が私を愛しているのと、私が彼を愛しているのは関係の無い事なんだ。

正巳がじっと私を見ながら私の内にあるものを読み取っている。

「めぐみさん。そう言う事なんですね。だったら僕がめぐみさんを愛しても、それはめぐみさんにとって関係ないって言う事ですか？」

「もちろんよ。私が今、あなたを愛している事で、あなたに何か影響がある？」

「もちろんありますよ。僕はとても安心出来るし、恐怖と戦う力が貰える」

「それはあなたが元々持っているのよ。あなたはあなたの力でそれと戦っているの。私のせいじゃないわ。それを知れば次に進める。そして、戦う事の意味の無さも分かるわ。でもね、今のあなたには今の幻が必要なの。だから、その幻を大切にね」

「また、幻ですか？」

「そうね。とにかく私、帰るわ」そう言って私は夫に今から帰ると電話で伝えた。

正巳が車で送ってくれた。

「どうして春樹は今日あなたに降りられなかったんだろう？」運転する正巳の横顔に言う。

「すみません。僕のせいです。でも、めぐみさんが僕を呼び戻してくれて助かりました」

「たまにあるの？」

「はい。でも、梶さんまで拒絶するなんて・・・」

「あなた冷えきったものね」

「僕の弱さです」

「そう。でも、それも必要なのよ。それを持っているからあなたは素敵なの」

正巳は何も言わずに首を振って見せた。

「幻ってね、エネルギーの振動の事なのよ。一つの大きなエネルギーが振動していろんなものを形作ってるの。それを私は幻って表現してるだけなのよ。だから、岩も幻、人も幻。つまり、実体はエネルギーの振動」

「エネルギーの振動が幻ですか？」

「そう言う事ね。別に物質って表現しても良いんだけど、そうしてしまうとそれぞれが違うものみたいに思えちゃうでしょう？だから、同じものって言う意味を込めて幻って表現してしまうの」

「なんとなく判りそうです。めぐみさんがさっき見せてくれた神のエネルギーがいろんなものに変化してるだけなんですね」

「そう。それをしっかり心に沈めて」

正巳はそれに頷いて見せた。車は順調に私の家に向かって走っていた。
「何時、お父様を探しに行くの？」後もう少しで家に着く時に彼に尋ねる。
「明日にでも行けると良いんですが……。めぐみさんも本当に行ってくれますか？」
「行くわよ。だって約束したでしょう？」
「ありがとうございます。でも、仕事の方は大丈夫なんですか？」
「大丈夫。誰かがちゃんとコントロールしてるみたいに巧く空いてるわ」
「じゃあ、明日こちらまで迎えに来て良いですか？」
「そうして貰えるとありがたいわね。でも、社長としてはそんなに休めないでしょう？」
「僕も二、三日なら何とか空けられると思います。それに、今のままだとチャネリングは出来ないから」

「自分の状態をちゃんと把握出来てるのね」
「それぐらいならなんとか……。でも、コントロール出来なきゃどうしようもない」
「そんなに落ち込まないで。そんなあなたが素敵だって言ったでしょう？」
「でも、困るんですよ。このままじゃ」
「頑固者！」
「めぐみさんには判らないですよ。突然インポテンツに成ったようなものなんですから」
私はおかしくって笑い出す。
「今まで出来てた事が出来ないって言うことなのね。でも、元夫の波動は見えた訳でしょう？」
「波があるんです。あの時には見えたけど、あの後梶さんさえ降ろせなかった。前にそうなった時には、そんな状態を繰り返して、最終的には一月程完全に力を失ったままだった。あの時は梶さんがいてくれたから何とか乗り越えれたけど……。今回はいつまでかかるかも判らないし、梶さんももういない」

「なるほど。仕事に差し支えるのね。それを心配してるんだ」
「それだけじゃないけど……。だって僕にあの力が無ければ、外に何も無いんです」
「だから無くしたのよ。あなたがそれに頼り過ぎたから。でもね、そんな力無くってめちゃんと出来るわよ。それにもし出来なくなったらやめちゃえば良いんでしょう？」
「めぐみさんは関係ないからそんな事が言えるんだ。半分に減らしたとは言え、まだ社員だって居るし、予約だって入ってる。他に僕の仕事出来る人なんていないんだから」
「それはご愁傷様。私にはそれについて何も言えないわ。それよりもあなたが今しなくてはいけない事は、お父様を探す事。そして、もし最悪の状態であったら、あなたがお父様の魂に愛を与える事。それだけが大切なんだと思うけど」

「こんな僕に何が出来るって言うんですか？梶さんさえ降ろせない僕に」
「さあ？じゃあ、やめましょうか？私は構わないわよ。あなたが好きにすれば良いわ。あっ、そこを曲がった所で止めて」

私は自宅前で止めて貰った。そして車を降りて彼に言う。
「どうも、ありがとう。私はあなたに関われない。あなたの問題はあなたが片付けるのよ。私は私のしたい事だけするの」そう言って玄関のチャイムを鳴らす。元夫がカギをあけて外に出て来た。

「正巳が送ってくれたの」私は元夫に言ってさっさと家に入る。元夫は頷いてパジャマのまま外に出て来た。

「送ってくれて、ありがとう。めぐみは役に立てたかな？」
「どうもすみませんでした。僕、めぐみさんを怒らせちゃったみたいです。でも、やっぱりめぐ

みさんにお手伝い頂きたいので、明日迎えに上がります」

「そう。判った。そう言っておくよ。多分、めぐみは怒って無いと思うよ。そんな顔して無かったから。それより気をつけて帰ってね」

「ありがとう御座います。じゃあ、おやすみなさい」正巳はそう言って車を出した。

元夫は門を閉めて、家に入った。

私は自分の部屋のベッドに寝転んでいた。

「めぐみ、五十嵐君が心配してたよ」ドアを少し開けて元夫が言った。

「何を？」私が言う。

「めぐみを怒らせたって」

「疲れちゃっただけよ」

「だったら、ゆっくり休むと良いよ。明日迎えに来るって言ってたから」

「ねえ、あなた。今夜あなたの部屋で寝ても良い？」

「構わないけど、疲れてるんじゃないのかい？」

「疲れてるからあなたと居たいの」

「判った」

彼はそう言ってドアを閉めた。

私は起き上がって、お風呂に入り、夫の部屋で寝た。

昨夜私は何年かぶりに、元夫のベッドと一緒に眠った。朝、彼を仕事に送り出し、掃除と洗濯を済ませ、紅茶を飲んでいる時にチャイムが鳴った。

「おはようございます。五十嵐です」正巳の声だった。

「ちょっと上がって待っててくれない？私はそう言って玄関を開ける。

正巳はいつもの仕事用のスーツと違って、動きやすそうなカーキのパンツとジャンパージャケットを着ていた。

「失礼します」正巳はそう言って入って来た。私は彼にも紅茶を一杯入れて、彼の前に置く。

「四国へ行くのよね。泊まる用意をした方が良いのかしら？」

「はい。出来れば二泊ぐらいでお願いします」

私は頷いて自分の部屋で用意をする。

はき古した柔らかいジーンズに、ゆったり目のシャツを着て、その上にベージュ色の厚手のコットンセーターを肩にかける。荷物はすぐに出来た。

その後干したばかりの洗濯物を雨のかからないところへ移動させ、元夫に置き手紙をする。

『二、三日正巳と一緒に、彼の行方不明の父親を探しに四国へ行きます。

洗濯物を干してあるので帰ったら取り込んで下さい。

落ち着いたら電話します。心配しないで下さい。 めぐみ』

私は風よけの為のコートとボストンバッグ、それと置き手紙を持って正巳の元へ戻る。

「準備OKよ。行きましょうか」私がそう言うと正巳が立ち上がって、コートとバッグを受け取る。

「昨夜はすみませんでした」そう言って可愛らしく頭を下げた。

私は笑いながら言う。「しょうがない子ね。先に車に行ってて。これを片付けたらすぐに行くから」そう言って紅茶のカップを持ってキッチンへ行った。

「分かりました」彼はそう言って私の荷物を持って玄関を出た。

私も洗い物をしてから、玄関に置き手紙を置いて、彼を追った。

家の前に止まっていたのはいつものベンツでは無く、右ハンドルの4WD車だ。これならたいの所へ行けるだろう。

「めぐみさん、鍵閉めましたか？」私が乗り込んだ途端に彼が言った。

「多分」私は少し自信が無い。

「確認して来て下さい」

正巳に言われて、もう一度車を降りて確認する。

「大丈夫。かかってたわ」

「じゃあ、いきましよう」正巳はそう言って車を発進させた。

車は近くのインターチェンジから高速道路に入り、順調に進んでいる。

「これ、あなたの車？」

「はい。田舎の山道だとベンツは不便だと思って。これなら傷がついても平気だし、それにダー

トでも安心です。でも、乗り心地悪いですか？」

「いいえ。平気よ。若者らしいわ」

「若者らしいか……。めぐみさんが何故僕の事子供扱いするのか分かりましたよ」

「どう言う意味？」

「梶さんもそうだったけど、旦那さんもすごく大人だから」

「あら、彼も結構子供なのよ。男ってみんなどこか子供の部分を残してるんだと思うわ」

「めぐみさんの側に居ると僕も一人前の男に成れるかな」

「さあ？それはどうでしょうね。今のままでも充分一人前だと思うけど。半人前の社長だと社員が困るでしょう？」

「はい。でも、僕はピンチヒッターみたいなものだから、色んな人に助けて貰わないと」

「一人前でも、みんなに助けて貰えば良いのよ。助けてくれる人もそれで学んだり楽しんだりしてる訳だから。私だって、私の楽しみのためにこの車に乗ってるのよ」

「めぐみさんの楽しみって何ですか？」

「あなたが変わって行くのを見る楽しみ。今の素敵なあなたが、次にどんな素敵さを見せてくれるのかを楽しんでるの」

「欲張りですね」

「春樹と似てるのよ。彼もとびっきり欲張りだったでしょう？それですべて手に入れてしまって、後欲しいものが無くなっちゃったのよ」

「そう言う事ですか……。だったら僕はゆっくり変わりますね。そうしたら長くこっちの世界に居てくれるんでしょう？」

「それは分からないわ。命なんて一瞬の出来事ですもの」

「一瞬ね。僕にとっての二十九年は、永遠のようでした」

「辛かったのね」

「大切なものを失うために生きて来たみたいな気がします。だから、もう誰も大切に思いたくない気分なんです」

「可哀相に。私は大切な人を失ったけど、彼の出会った事を後悔して無いわ。だって、最高に楽しい時間を与えて貰ったもの。彼と出会えなければ、それは無かった。そのせいで苦しみも経験したけどね。でも、みんな大切な時間だったわ。いとおしい時間」

「僕にはまだそう思えない」

「それは、あなたが私じゃないからよ。楽しみの種類が違うの。あなたはあなたの世界を作って行くのよ。私が幸運だったのは、春樹と言う、同じ時間を同じ学びのために共有出来る人間を作り出せたって言う事かしらね」多分これが春樹の言ったステージの定義だ。

「ステージですか？」

「あなた、ちゃんと復活してるのね」

「はい。今朝起きたら元通りでした。それより、梶さんはステージについてなんておっしゃったんですか？」

「私と春樹は同じステージに居るって。でも、あなたは違うステージに居るから、私達の会話を理解出来ない事があるって言ってたわ」

「僕の居る場所が低すぎるんです」

「そうじゃないと思うけど……。多分、あなたは同じ一つの現象から私や春樹と違うものを学ぼうとしているんだわ。大体善悪の区別なんて存在しないのに、それに高低がある訳無いじゃない。あるのは同じものの違う側面だけよ。それで、言葉って言うのは同じ側面から見ている者

同士には通じてても、違う面から見ているものには何がなんだか分からないって言う事じゃないかしら？」

「だったら言葉って不便ですね」

「ただの道具だから。それよりも四国のどこへ行くの？」

「ああ、ちょうど四国の真ん中辺りです。高知と愛媛の県境くらいかな？小さな村があって、父はそこに呼ばれて行ったんです」

「あなたは行った事あるの？」

「ええ、子供の頃何度か父について行った事があります。四国は不思議な場所です。空海の張った大きな結界に守られていて、魔の入り込む余地なんて無いみたいに見えるんですが、何年かに一度大きな歪みが出るんです。それを直すために今回も父は呼ばれて行ったんだと思います」

「空海よりも大きな力？」

「そうです。僕なんかにはどうしようもない。本当は僕だって行きたくないんです。すごく怖い。でも、このまま放って置いたら、また同じ事が起こってしまう」

「なるほど。でも、恐れなくて。私に言える事はそれだけよ。春樹にも言われてるの。魂として本来の機能を果たさない凍りついた魂に出会った時、恐れなくてくれって。恐れると、愛のエネルギーがどんどん吸い取られて、愛の波動が起こらなくなるからって」

「愛のエネルギーが吸い取られる？」

「そう、相手は吸い取ることだけが喜びで、それを何にも利用しないんだって言ってた。魂は愛が無ければ存在意味がない。つまり、愛するために色んな幻を作り出しているのね。それが出来ない魂は、ただ破壊するだけ。ブラックホールみたいなものかしら？私にも良く分からないわ。春樹に説明して貰った方が良いかもね」

「次のパーキングで止めましょうか？」

「良いわ。私が呼ぶから。あなたは春樹に色々尋ねてみると良い」

『春樹、ちょっと説明してよ』私は心の中で彼に言う。

「五十嵐。昨日は大変だったな」何のショックも無く春樹は私の口を使ってしゃべり出した。

「梶さん。すみません。めぐみさんにもご迷惑をかけてしまいました」正巳も当たり前のようにそれに答える。

「かまわないさ。姉さんはどうせそう言うのが好きなんだ」

「僕は大丈夫でしょうか？とても怖いんです」

「そうか。怖いか。生きてる証拠だ」春樹は無責任に言い放つ。

「そう言う問題じゃないでしょうか？」正巳は少しムツとして言った。

「そうか？まあ良いじゃないか。その為に姉さんがいるんだ。思いっきり甘えて置けよ」

「冗談言ってる場合じゃないでしょうか？」私が抗議する。

「親父の事だが、ちょっとまずい事に成ってるのは確かだ。いつかはこう成るとは思ってたが、俺達が言って聞くような親父じゃなかったしな」まじめな調子で春樹が言った。

「はい。でも、このまま放って置く訳には行かないでしょうか？」

「それはそうだ。でもな、親父の為に前は動いてるんじゃないんだぞ。それをしっかり自覚してくれ。お前が学びたい事を教えてくれるために、親父が今の状態を作り出してくれたんだ。つまり、これはお前のための状況だと言う事をしっかり心に沈めるんだ」ゆっくりと、優しさを帯びた調子で言った。

「僕が今の状況を望んでいた」正巳は独り言の様に呟いた。

「そうだ。つまり、それを作り出しているのはお前自身なんだ。親父はそれを手伝ってくれてる

だけ。多分、親父にとってもそれが必要だったから手伝ってくれたんだろうけどな。とにかく、お前はお前の幻の中でこれから術を使うと思ってくれ」

「それに、どう言う意味があるんですか？」

「お前が恐れ、失望する事によって、お前の術も力を失うと言う事だ。姉さんもそうだけ。姉さんも決して恐れるな。どんなものが現れても、それは姉さんの作り出した幻でしか無いんだから」

「判った。でも、私には術なんて使えないわよ」

「姉さんはただ、傍で楽しんでいれば良い。姉さんが恐れずに楽しんでいることによって、五十嵐のエネルギーは枯渇しない。それと決して肉眼を使うな。肉眼に映るものは本質では無い。表面だけなんだ。人は表面が傷ついてもいくらでも癒せる。本質さえダメージを受けていなければいくらでも戦えるんだ。反対に言えば、体が傷ついていなくても、心がダメージを受けると再生が困難になる」

『あなたまだ戦いの中にいたの？』私が心の中で問う。

『必要なものしか現れない。戦いの中に学びたいものを持った者がそれを作り出す。その学びが終わらなければまた同じ事の繰り返し』

『判った』すべてが過程でしか無いのだ。

「今のをもう一度言って言って貰えませんか？」正巳が言った。

「何を？」私が言う。

「いま、梶さんがなんて言ったのか判らなかつたんです。本質さえダメージを受けなかつたら戦えるって言った後です」

「俺、何か言ったか？」春樹が言った。

「でも、めぐみさんは何か判ったって・・・」

「最近春樹と心の中で会話することが多いから、変に混線しちゃったのね。私が声を出すのを忘れちゃったんだ。一瞬の事だから良く判らないけど、あなたがどんな状態に成ったとしても、目で見て判断しないようにって言われて、ちょっと動揺したのよ。だってそんな、あなたがケガをするような状況を楽しめるはず無いじゃない。私は戦いを好まないもの。でも、必要のないものは現れないって春樹の思考が答えて、それに判ったって思ったんだと思う。やっぱりこの状況は面倒ね。春樹何とか成らないの？」

「仕方ないだろう？俺の肉体が無いんだから。それに思考の速度は会話よりずっと早いから、今みたいな事が起こるんだな。これから気をつけよう」

「必要のないものは現れないですか？それをめぐみさんは何故そんなに簡単に納得出来るのか。僕にはそれが一番分からない」

「春樹。どうしよう？どう説明すれば彼に一番分かって貰えると思う？私、昨夜からちょっと自信がないのよ」

「姉さんにしては珍しいな。姉さんに出来ない事が俺に出来る訳ないだろう？それが出来ないから俺は体で表現したんだ。どうだ、姉さんもやってみるか？」

「そう言う問題じゃないでしょう」

「だったら、言葉を探してみろよ。それが出来なきゃ直接その思考を流すと言う手もある。しかし、それをやってしまうと五十嵐が五十嵐でなくなる。五十嵐というフロッピーを一度初期化してしまう事と同じだ。そして、それに俺や姉さんの思考回路を刷り込む」

「駄目よ。そんな事したら、楽しみが無くなってしまう」私が抗議する。

「だったら、時間をかけて言葉を探せ」春樹が言った。

「すみません。僕がいけないんです。めぐみさんを完全に受け入れられて無いから・・・」正巳がすまなそうに言った。

「気にする事無いのよ。お互いに必要な過程だからこう言う問題が起こってるだけだから。この時間を楽しみましょう。こう言う言い方があなたにとって理解出来ないのね」

「すみません」正巳が言った。

「ちょっと考えてみるわ」私はそう言って暫く黙り込む。

車は順調に進み、岡山に入ろうとしていた。

私は心地良いまどろみの中で考えていた。

私は何故こんな道筋でものを考えるのだろう。昔からそうだった訳ではない。ならば、何時からなのだろう？春樹と再会した時にはどうだったのだろうか？私はあの時彼との不倫に対してとても大きな不安を抱えていた。夫を傷つけ、彼の家族を傷つける行為として、大きな罪悪感を持っていた。そして、その時それは相手を傷つける事には無く、自分自身が傷つきたくないだけなのだと言った。私は元々自分の力に何の自信も持っていなかった。つまり、自分には何もできないと言う事が前提として在ったのだ。何も出来ない自分が何をすべきか？それに思い至った時、他人に関われないと言う龍の言葉を受け入れた。しかし、正巳には色んな力が有る。そしてそれは身を削るような修行の結果手に入れたものだ。まず、最初のスタンスが違い過ぎる。ならば春樹はどうだったのだろうか？私は春樹に尋ねる。

『ねえ、あなたは最初から他人に対して自分は何も出来ないって言う事を知ってたの？』

『俺は最初に姉さんと出会った時に、それを痛感した。俺と姉さんの因縁を知ってたから、姉さんの望むものも判ったし、それを与えられない自分も理解出来た』

『辛かった？』

『ああ。俺なりに辛かったぜ。だって、あの頃本当に欲しかったのは姉さんだけだったんだから。なのに、俺はそれを欲しがらな事すら出来なかった』

『確かに、高校生にしては大きな挫折ね』

挫折か・・・。正巳は挫折した事が無いのだろうか？

さっき正巳は、大切なものを失うための人生だったと言った。つまり、彼の中には大きな挫折が在ると言う事だ。子供の正巳は、愛に飢え、必死でそれを求めていた。そう言えば、六歳の正巳は、春樹の事を知っていた。

『春樹、あなた何故六歳の時の正巳に会いに行ったの？』

『ああ、あれな。五十嵐の式を封じる時に、子供の頃まで遡ったんだ。あいつの恐怖を知るために』

『どこに在ったの？彼の恐怖は』

『小学校に入ってからだった。それまでの五十嵐はあまり人と関わって無い。だから、奴の恐れの対象は魔物だけだった。しかし、学校へ行くようになってから、人をも恐れるようになった。魔物は封じる事が出来るが、人にそれは出来ない。それで奴は魔物の方に近づいて人を遠ざけたんだ』

『可哀相に。でも、あなたは何故そんなに正巳を愛したの？』

『言って無かったかな？前に、五十嵐は俺の息子だったんだ。それを俺の不注意で死なせた。俺にしては随分大切にしていた息子だった。大体いつも俺は自分の事ばかりの為に生きてたから。でもその時にはその息子が可愛くて仕方なかった。なのに、俺はそれを死なせた。その思いが五十嵐に移ったんだ』

『なるほど。納得の出来る感情ね。でも、私とは何の因縁も無いって言ってたわね』

『ごめん。それがそうじゃない』

『何よ、騙したの？』

『そう言うつもりでも無かったんだが……。実は姉さんの産んだ子が五十嵐だ。でも、その時の姉さんは自分の命と引き替えに五十嵐を産み落とした。だから、会った事は無い。まんざら騙した訳でも無いだろう？』

『あなたって言う人は本当に……。』

『そんなに怒るな。また、五十嵐に悟られるぞ。それに姉さんの身代わりだったから特別愛したんだ』

『なのにあなたは彼を死なせたの？』

『悪い悪い。愛するものを次々と失うと言うテーマの生だったんだ。姉さんを失い、その子供も失った』

『あなたはその後どうしたの？』

『自暴自棄。いつものパターンだ』

『本当に懲りない人ね』

『魂の傾向というのは……。』

『もう良いわよ。あなたの言い訳を聞いても仕方ないんだから。それより、正巳にどう説明するかが問題なのよ』

「めぐみさん。瀬戸大橋ですよ」正巳が半分眠りかけていた私を起こして言った。

「そう。出来るだけ真ん中を走って頂戴」

「どうしてですか？景色が見えないですよ？」

「駄目なの。私、こう言う大きな建造物とか、人の力を越えたようなものが苦手なのよ。それに、高いところもね」

「めぐみさんに苦手が在ったんですか？」正巳は本当に感心していた。

「高い所とあなたが苦手よ」

「起こさなければ良かったですね」

「構わないわよ。ちゃんと寝ていた訳じゃないし」

「寝てたんじゃないんですか？」

「春樹と話してたの。それであいつに騙されてた事が判ってちょっと怒ってたところよ」

「僕にはキャッチ出来なかった。また、鈍ってきたかな？」

「多分そうじゃないと思うわ。私達特有の周波数が有るって前に春樹が言ってたから。そこで話してたんじゃないかしら」

「めぐみさんは意識して無いんですか？」

「どうしようも無いもの。何の修行をした訳でも無いし、どう言う仕組みになっているのかも判らない。それを知る必要も無いしね。ただやって来る現象をそのまま捕らえて、それに対処するだけで精一杯よ」

「でも、知りたいって思わないんですか？」

「あなたは、自分がどうして呼吸してるかちゃんと知ってる？」

「医学的にですか？」

「そう、その現象一つを説明するには、医学的でも有り、物理学的でも有り、宇宙科学的知識も必用だと思う。けど、生まれたての赤ん坊でも、呼吸はするわ」

「知る必要は無いって言う事ですか？」

「私は呼吸よりも、もっと知りたい事があるの」

「ちなみにそれは何ですか？」

「愛かしら？私がいかに人を愛するか。それを知りたいの。その為に使える力を使うだけよ」

「使える力ですか？」

「そう、使えない力を身につけるよりも、使える力をフルに使って出来る事をしたいだけなの。つまり、必要なものはすべて持っていると言う前提でものを考えるのよ。持っていないものは私がしたい事に必要ない。今持っている力で出来る事が私の役目。もっと違うやり方で愛を理解しようとして生まれた人もいる。それはその人に任せる。そんな感じ。私の中にああ成らなければならぬって言うような、理想の形って言うものが無いのよ。何でもOK。出来上がったものはすべてそのまま完璧なの」

「諦めですか？」

「違うわ。私は満たされているのよ。全ての欲を切り捨てる事と、全てを手に入れてしまう事は同じ事なの。欲しいものが何も無くなるって言う事だから。だから持っているもの以上を欲しがる必要も無い。そして、それを失う事を恐れる必要も無い」

「失う事を恐れないめぐみさんが、何故梶さんを失った時に、そんなに悲しんだんですか？」

「悲しみと恐れは別よ。悲しみは悲しみとして受け入れればそれで良いの。まだやって来っていない悲しみを恐れる事によって、不必要な幻を作り出し、自分を拘束してしまう。それが昨日のあなたの状態。あなたのエネルギーが冷えきって、波動が起こらなくなっていたの。あのまま行ったらあなたの魂は凍りついてしまうって思えた。あなたの恐怖があなたのすべてを凍りつかせるの。多分、さっき春樹が言ったのもそう言う事だと思う」

「めぐみさんにとっての恐怖の意味って何ですか？」

「危険信号であり、道標。私だって高い所や大きな建造物は恐怖の対象よ。でも、恐怖は恐怖のまま受け入れれば、それが幻を作り出しはしない。例えば、自分が死ぬんじゃないかって言う漠然とした恐怖に取りつかれたとするわね。でも、人は生まれた限り必ず死ぬ。その死の恐怖に捕らわれると、それがすべてのものを恐ろしい幻に変化させる。閉所恐怖症の人には、私達にとってただの便利な箱でしかないエレベーターが、どこにも逃げられない牢獄に見えてしまうようにね。その人にとってそれは紛れも無い現実なのよ。幻と現実の境目ってその程度のものなの。私の前に有る現実、他の人にとっての幻。他の人にとっての現実、私にとっての幻。どちらも幻であり、現実であるの。私はそれを現実と捕らえるのをやめただけ。でなければ、現実という定義が刷り込まれている私には、春樹と話すと言うような非現実的な事が認められなくなるし、全然縁もゆかりも無かったあなたとこうして四国へ向かう事も理解出来ない。でも、幻だと理解すれば全部受け入れられる。私はこの幻を楽しみたいからこうしているって言う風にね」

「少しづつ分かりかけて来ましたよ。それとめぐみさん、向かっているんじゃないかともうここは四国ですよ。もうすぐ左手に善通寺が見えます。空海の生まれた場所です」

「そう、話に夢中になっている間に怖い物は通り過ぎたのね。ラッキー」

確かに私達の乗った車は都会とは違い、前にも後ろにも車のいない、贅沢な高速道路を走っていた。

「次のサービスエリアでトイレ休憩と、食事にしましょう。うどんが旨いですよ」正巳が言った。

「そうね。讃岐ですものね」

十分程で豊浜SAに入った。

お互いにトイレを済ませて大きな地図の前で正巳に尋ねる。

「どの辺りへ行くの？」

正巳が地図を指さしながら説明する。「川之江のジャンクションで高知道に入って、大豊のインターで降ります。その後国道を半時間程西に走った所です。早明浦ダムの少し向こうですよ。高速道路が出来て本当に便利になった。子供の頃には辿り着くのに一日がかりだった」

「そうね。日本から田舎が無くなって行くわね」私はそう言って頷いた。

「とにかく食事をしましょう」正巳がそう言ってレストランへ入る。

私達は案内された席に着いて、うどんの定食を注文する。客が少なかったので、それはすぐに運ばれて来た。

「めぐみさん、四国は初めてですか？」正巳が食べながら言う。

「いいえ。元夫と一緒に結構来てるわよ。私達ドライブするのが好きなの。四国は八十八箇所の札所があって、結構ドライブの目的になるの」

「全部回られましたか？」

「まだ六十ちょっとかしら？一泊の予定で、回れるだけ回る」

「やっぱり白装束で？」

「まさか？別に信心してる訳じゃないし……。でも、四国の結界の中にいると、本当に元気に成れるし。空海の愛に包まれてるのを感じるのは心地良いものよ」

「めぐみさんは空海についてどう思われますか？」

「大きな欲望の人。大欲にとりつかれた人かしら？」

「欲ですか？空海には一番似合わない表現に思えます」

「そうね。でも、空海は人々を救いたって言う大きな欲にとりつかれた。そして、彼はそれが不可能だと言う事も理解した。それでもまだ何かしたくって、人々と一緒に悲しむ事を選んだんだと思うの」

「一緒に悲しむですか？」

「そう。空海は人を救う事が出来ないのなら、せめて一緒に悲しんでやろうと思ったのよ。それがこの八十八箇所のしくみ。大きな結界を作って、その中で空海を必要とする人々と一緒に歩いてくれるの。悲しみは本人が癒すしか無い事に気づいて、ならば少しの間、一緒に悲しんであげようって思ったんだわ」

「新しい説ですね」

「はい。私の新説です」そう言って私は笑って見せ、食事を続ける。

正巳は食べ終わってコーヒーを二つ注文する。

「めぐみさんって一体どう言う人なんですか？」

私は食べ終わった食器を端に寄せて笑う。

「普通のおばさんじゃない？」

「普通のおばさんは、多分空海の気持ちを感じたりしないと思うんですけど……」

「それは分からないわ。だって沢山の人が今もこの四国を、空海と一緒に回っている訳だから」

「僕は人を知らな過ぎるのかな？」

「随分謙ったわね。あなたが尋ねたい事、分かっているわよ。ちょっと意地悪しても良いぐらい親しく成ったって言う事」

「酷いですよ。めぐみさん。ちゃんと答えて下さい」

「私だって判らない事の方が多いのよ。何故今私がこうなのかって言う事に関しては特にね。空海に関しては、私が八年も趣味で書き続けている『龍』の物語を書くことで知ったの。それを書く為に必要だったから、あなた達の不思議な力の事も知っている。ひふみの祓え言葉や、九字や、光明真言。簡単なものならそれが何を意味しているのかぐらいなら判る。でも、それは知識でしかないの。それだけよ。でもね、書く為に調べたって言うのでも無いのよ。その知識と偶然出会って次が書き続けられるって言う感じ。だから、暫く書けなくても全然不安になったりしない。物語りは向こうからやってくるって言う事も、それを書く事によって理解したから」

「でも、さっきの空海の新説は、知識じゃなかった」正巳は運ばれて来たコーヒーを飲みながら言った。

「きっと私が空海を大好きだから教えてくれたのよ。私は、龍も、空海も、最澄も、出雲の神々も、みんな大好きなの。だから、その思いを受けて彼らが私に色んな事を教えてくれるんだと思う。必要な知識を運んで来てくれて、それを使って動き出す。そして、春樹もやっぱり同じ。私は架空と現実を区別しない。私が区別するのは、好きか嫌いか。それだけよ。でも、最近嫌いが少なくなって来たのがちょっと寂しいけど。でも、それは私が巧くエネルギーをコントロール出来てるって言う事だから」

「善悪は無くても、好き嫌いはあるんですか？」

「もちろんよ。それが道標に成っているんだもの。好き嫌いはとっても個人的な感情でしょう？私達はその感情を手に入れる為に個に別れて生まれて来てるの。そんな大切なものを押さえ込むなんて馬鹿げてるって思わない？」

「なんとなく掴めそうで掴めない。見えそうで見えない。ふっと気を抜くとそれが見えていたりもする。めぐみさんってそんな感じですか。梶さんはどうやってめぐみさんを理解したんだろう？」

「本当ね。私だってそれが一番不思議だったわ。前世の事や、チャネリングなんかより、春樹が私をあれ程強く愛している事の方がずっと不思議だった。でも、今は知ってるわ」

正巳は首を傾げて見せる。

「私がそれを望んでいたからよ。自分のすべてを肯定する存在を必要としたから彼が現れて、それを教えてくれた。つまり、私が私を肯定したの。それだけなのよ」

「自分で自分を肯定する。恐れも感情の一つ。つまり、恐れ無いんじゃないかと、それにエネルギーを与えない。それで良いんですか？」

「OK 素晴らしい。さあ、そこまで判ったんだったら、先に進めるわ」

「はい。まだなんとなくですが・・・。取り敢えず、出発しましょう」

正巳はそう言って伝票を取ってレジに向かった。

「割り勘にしましょう」私が声をかける。

正巳が振り向いて言う。「心配しないで下さい。一人前以上に稼いでいますから。それに、僕の為に来て貰ってるんです。帰るまではすべて僕に任せて。それに女性に払わせたりしたら、梶さんに怒鳴られます」

「あいつ、そんな教育をしたの？」

「はい。男の金は女に使えって言われてます。その為に男は働くんだって」そう言って彼は支払いを済ませた。

「ご馳走様」私は彼に礼を言った。

「気にしないで下さい。梶さんの身代わりです」そう言って私の頭を掴んで揺すった。

「正巳。どうしたの？」私は驚いて言った。

「すみません。いつも梶さんがするから、どんな気がするのかと思って」

「どんな感じがした？」

「とても、いとおしい感じがしました。やっぱり梶さんは愛する事の達人だ」

「かも知れないわね」

そんな話をしながら車に乗り込み、サービスエリアを出発した。

私達の乗った車は、高知道に入り、いくつものトンネルを抜け、高速道路を降りた。

絵に描いたような田舎の国道に入る。年配の人の運転する軽トラックと大型のダンプがすれ違う車のほとんどだ。山間に流れる川沿いの国道を走り、早明浦ダムを通り過ぎた辺りで国道を逸れて、県道に入る。

景色は良かった。後二週間もすれば桜がこの山々を這い上がるように咲くかもしれない。今は所々に白い花をつけた木蓮や、こぶしの木が見える。

県道を少し走ると、小さな集落があった。思った程山の中ではない。農協の建物もあれば、鉄筋コンクリート作りの小学校もあった。

「めぐみさん、着きましたよ」

少し坂道を登り、集落を一望出来る場所に建つ大きな屋敷の前に車を止めて、正巳が言った。午後三時少し前だった。

垣根越しに見えるその屋敷は、最近建て直されたようで、とても立派な作りだった。一階の全面がすべて硝子戸になっていて、しっかり磨き込まれた縁側が着いている。その上屋根には衛生放送用のアンテナもあった。

「新しいお家ね」私が言う。

「そうみたいですね。僕もこの家には初めてです。昔は茅葺き屋根の家でした」

「お父様はこちらに招かれたの？」

「はい。此処は代々の庄屋で、村の窓口になっているのです。僕が父の事を尋ねて来ますので、めぐみさんは此処で待って下さい」

正巳は車を降りて一人で門の中に入る。私も一応車を降り、そこで彼を待った。門には大村と言う表札があった。

家の前には小川が流れている。私は屈んでその小川を覗き込む。澄んだ水が流れていた。川底には三センチ程の長さの藻が、櫛で撫でつけたように川下に向かって整然と流れている。そう言えば、昔こんな川でメダカ取りをしたものだ。都会にいと絶対に見る事の出来ないものの一つではないだろうか？

しばらくして正巳が門を出て来た。

「めぐみさん、どうされました？」川に向かって屈み込んでいる私に正巳が言った。

「あっ、ごめんなさい。あんまり綺麗な水が流れてるもんだから、見とれちゃってた。ところで何か分かった？」私は立ち上って言った。

正巳は首を振って見せる。「取り敢えず車に乗って下さい」

私は頷いて車に乗り込む。正巳はエンジンをかけて、そのまま走り出した。

「この先のいつもの山に入ったのは確かです。取り敢えず今日はその山の入り口まで行ってみましょう。父の何かがキャッチ出来るかもしれないから。でも、山に入るのは今日は無理です。明日もう一度出直さない。日が暮れてしまうと危険だから」

「お父様は一人だったの？」

「はい。いつもは物部村の太夫と入るんですが、今回は太夫が病気で来れなかったらしいんです」

「大村さんはお父様を探さなかったのかしら？」

「父は、いつも仕事が終わるとそのまま帰る人なんです。いざなぎ流の最後の儀式があまり好きじゃなくて……。だから今回もそうだと思ってたみたいです。それで大村さんも父が行方不明なのを知らなかった。村をあげて山狩りをしようかと申し出てくれたんですが、断って来ました。父はきっとそれを望まない……」

いざなぎ流、四国の物部村にだけ継承されている、陰陽道の流派だ。今も太夫と呼ばれる行者が、様々な霊的な問題に対処してくれる。

「そう。お父様ってそう言う人なのね」人との付き合いがあまり好きではないのだろう。

正巳は静かに頷いて見せた。

「少し道が悪くなりますのでしっかり捕まってる下さいね」正巳が言った。

軽トラックの轍の着いた、林業用の細い道が続いていた。草こそ生えていないが、舗装されている訳でも無さそう。私はたまに轍に乗り上げて大きく揺れる車の中で、ダッシュボードとシートに両手を突っ張って体を支えた。不用意に喋ると舌を噛みそう。

車はくねくね曲がりながら、杉が植林された山を一つ越えた。そして、今度は杉ではなく、いろんな種類の木が生えている自然のままの山の麓に出た。

「この山です。ここから先は道がありません」

「神様の山なの？」

「呪詛林です」正巳は低い声でそう言って車を降りた。

呪詛林。悪いものをそこに捨て、出て来ないように結界を張って鎮める場所の事だ。

私も彼に続いて降りる。天気も良く、空気も澄んでいる。

「あなた、何か感じる？」私が尋ねた。

「いいえ」正巳はそう言って大きく首を振る。そして続けた。

「僕、やっぱり怖い。どうしたら良いんですか？」縋り付くような眼差しで言った。

「怖くなくなるまで待てば良いのよ。恐怖にエネルギーを与えないで、怖くなくなるのを待つ」そう言って私は微笑んで見せる。

「待っても待っても怖かったら？」

「あなたが恐怖にエネルギーを与えない限りそんな事有り得ない。まだ起こっていない事を想像して、それを恐れているからそれは無くならないだけ。ただそこに有る恐怖をそれだけのものとして受け入れれば、それで終わるのよ。よく考えてみて、今私達の目の前にあるのは、美しい自然の山。それを恐れる必要がある？あなたが今恐れているのは、あなたが作り出した恐怖の幻を見ているからなの。この山の中で、とても恐ろしい事が起こっていて、自分はそれに対処出来るかどうか分からない。もし、しくじったら死よりも恐ろしい状況に陥ってしまう。つまり、その想像にあなたは脅えているの。目の前に有るものをそのまま受け入れれば、これはただの山なの」

「でも、僕は知っているんです。此処で何が起こるのか」

「何が起こるの？」私が尋ねる。

「此処は、不浄なものをすべて捨てに来る場所。そして、此処の結界がしっかり機能していない。父がこの場所の結界を張り直すのに失敗したって言う事です。その結果、此処に捨てられ封じ込められていたものが溢れ出す」

「結界が壊れるって……。あなたは何も感じないんでしょう？」

「はい。いや、そうじゃないかも知れない……」正巳は混乱している。

「だったらちゃんと見なさい。見て見ぬふりをするのはとても危険だから。封じ込められていたモノ達が溢れ出しているの？」

「分からない」正巳は頭を抱えてその場に蹲ってしまった。

私は目を閉じてその場所を見る。そこには白い髪を蓄えた白髪の老人が見えた。その老人は私達のすぐ側まで歩み寄ると、私に会釈し、そのまま踵を返して山の中へ入って行った。

「正巳。あなたのお父様って、白髪で白い髭を生やしている七十歳位の小柄な人じゃないの？」

「そうですけど、それがどうかしましたか？」

「今、ご挨拶にみえたわ。そのまま山に戻られたけど」

「そんなはずない。だって、父の魂を感じないのに・・・」

「だったら私は今、何を見たのかしら？」

「判りません。でも、今日は引き返しましょう。日が落ちるとさっきの山を越えるのが困難になります」

「判った」私はそう言って車に乗り込む。

正巳もすぐに車に乗り込んで、エンジンを駆けて、走り出した。少しバックした所で、何度か切り返してUターンし、元来た道に戻る。私はまた、両手を突っ張って体を支えながら揺れに耐えた。

大村家の前を通り過ぎる頃には、日が山に隠れて薄暗くなっていた。

「めぐみさん、何故僕に見えないものが見えたんですか？それに、何故僕が何も感じないって言ったのを違うって思ったんですか？」県道に戻った頃、正巳が言った。

「判らないわ。ただ、あなたが何も感じない筈がないって思ったの。だって、あの場所は特別な場所だったでしょう？なのにあなたぐらいの力がある人に何一つ見えない筈ないもの。それと、春樹が一番初めに言ったのを思い出したの。あなたは力でねじ伏せる。それが出来ない時には見逃してしまうって。それはとても危険だって言われてたから。確かにそうだとしたらとても危険だって思えたの。ありのままを見て、それを受け入れる事が大切なのに、あなたの見ているものがありのままでなかったら・・・」

「ありがとうございます。確かにいつも梶さんに言われてた事です。いくら注意されてもなかなか直らない」

「それは仕方ないわよ。でも、きっといつか出来るように成るわ。でも、あの白髪の老人は私に何を言いたかったのかしら？目を閉じたらふっとやって来て、私に軽く会釈するとまた戻って行ってしまったの。本当にあなたのお父様だったのかしら？それとも他の魂？」

「どっちにしても何故僕にキャッチ出来ないんだろう？」

「それなら判るわ。あなたがそれを拒んでいたからよ。あなたはいつもの癖で、それを見過ごすモードに入っていたの。きっとあなたに何か伝えたかったんだと思うわ」

「僕はなんて情けない奴なんだ。あんなに辛い修行に耐えて来たのに、何も出来ないなんて」

「それは違うわよ。何も出来ないんじゃないでしょう？あなたには色んな事が出来るのよ。あなたは春樹と同じだけの能力を持っているの。だから春樹があなたに後を託した。一つ見えなかっただけですべてを否定してしまう事なんて無いのよ。それがあなたの悪い癖。私は今日あなたの代わりにあの老人と会った。つまり、あなたはもう見逃す訳にはいかないって言う事。明日、あの場所に行ったら、今度はあなたがちゃんと話を聞けば良いだけじゃない」

「でも、それは僕の仕事です。なのに僕はそれから逃げて、めぐみさんにそれをフォローさせてしまった」

「ねえ、正巳君。私はあなたの為に生きている訳でも、あなたの為に此処へ来た訳でも無いって何度も言ったわよね。それをちゃんと理解しなさい。その意味を深く考えて、答えが出たら私

に教えて。私、ちょっと疲れた」私はそう言ってからシートに持たれて目を閉じた。

正巳は頷いて見せると、黙って前を向いて運転していた。

一時間程走って正巳が私を揺り起こす。

「めぐみさん、起きて下さい。宿に着きましたよ」

「ごめんなさい。ぐっすり眠ってたわ」

「躰かいてましたよ。それに寝言も」

「なんて言ったの？」私は不安になって尋ねる。

「春樹、愛してるって」

「だましたわね」

正巳が笑いながら答える。「はい。静かに寝てましたよ。僕はまた梶さんと話してるのかと思ってました。今夜は此処に泊まりです。温泉もあるし、鋭気を養って下さい」

「ところで、此処、何処？」

「祖谷溪の傍です。母の知り合いの旅館なんです」

「そう。温泉、良いわね。私大好き」

「僕もです。じゃあ、行きましょう」彼はそう言って車を降り、私の荷物と自分の荷物を下ろした。

正巳は玄関に入って声をかける。すぐに番頭さんらしき人がでて来た。

「すみません。僕、五十嵐正巳って言うんですけど、女将の涼子さんはいらっしゃいますか？」

番頭さんらしき人はすぐに中に入って女性を呼んだ。

「いらっしゃいませ」着物姿の五十がらみの女性がすぐに出て来た。正巳の姿を見ると嬉しそうに言う。

「あら、まーちゃん。いらっしゃい。どうしたの？」

「ちょっと用があってこの近くまで来たんです。部屋、有りますか？」

「一つだけ空いてるわ。それで良い？」私の方をちらっと見てそう言った。

正巳は私に向かって言う。「めぐみさん、それで構わないですか？僕、何もしませんから」

「仕方ないわね」私が渋々答える。

正巳は女将に向かって言う。「じゃあ、お願いします」

私達は女将に案内されて部屋へ行く。

「るみさんは元気？」歩きながら女将が尋ねる。

「はい。母は元気にしています。昨日電話でこっちへ来るって言ったら、ぜひ涼子さんの所へ泊めてもらえって言われたんです」

「そう。うち、五部屋しか無いから。でも、一番良い部屋が空いてて良かった。帰ったら、るみさんにちゃんと報告してね」そう言って一番奥まった部屋の引き戸を開けた。

「どうぞ、こちらのお部屋です」

中に入ると、そこは二間続きの広い部屋で、柱や梁は良く磨き込まれて黒光りしていた。そして、壁は塗り替えたばかりのように真っ白で、畳も青く、良い香りがした。入ってすぐの部屋は八畳で、奥の部屋が十二畳あった。しかし、畳自体が都会と違って大きいので実際はもっと広がった。

閉めてあった窓の障子を開けると部屋の二面が硝子戸になっている。外が暗いので良くは見えないが、硝子戸を開けると冷えた空気と川の音が流れ込んで来た。

女将が座ってお茶を入れる。正巳が下座に座り、私の為に上座を開けていた。私はそこに座る

。

「いらっしゃいませ。私、当旅館の女将で沢村涼子と申します。どうぞごひいきに」改めて私にそう言って頭を下げた。

「こちらこそよろしく申し上げます」私も少し恐縮する。

「涼子さん。こちら伊藤めぐみさん。梶さんの大切な人」

「梶さんってあなたの会社の社長さん？」

「ええ。でも、一月に飛行機事故で亡くなりました。それで、今のところ僕が社長をやっています」

「えっ。そうだったの……。あなたが社長。それはご出世で……。でも、るみさんは大丈夫なの？」るみさんと春樹の事を知っているのだろう。

「はい。どうせ母の事だから何も言って無かったんだろうと思ってました。直後には随分ショックを受けてたけど、めぐみさんが来てくれて立ち直ったって言ってました」

女将は私の方を不思議そうに一瞥して言った。「そう。一度電話してみるわ」

「そうしてやって下さい。きっと喜びます」

女将は頷く。「食事の用意をしますね。それまでお風呂で疲れを取って下さい」そうってお風呂の場所を説明すると丁寧に一礼して出て行った。

「母の親友なんです。でも、母は負けず嫌いだから、自分が弱っている時には連絡を取らないんですよ。今回僕に此処へよるように言ったから、もう大丈夫だって言う事だと思います。母が泣けるのは梶さんとめぐみさんの前だけなんです。本当に感謝してます」正巳はそう言って私に笑って見せた。

「それも私には良く分からない事の一つよ。でも、私もるみさんの事大好きだから」

「温泉に入りましょう」正巳はそう言って立ち上がる。

お風呂から戻ると食事の用意が出来ていた。正巳は飲んでいたビールを私のグラスにも注いでくれた。

「すみません。喉が渴いたから先に頂いてました」

「お待たせしちゃってごめんなさい」私はそう言ってそのビールを飲んだ。

「さっきの宿題、少し解けましたよ」正巳が言った。

「なんだっけ？」私は本当に忘れていた。

「めぐみさんが、僕の為に生きているのでも、此処へ来たのでも無いと言う事の意味を考えろって言ったじゃないですか？」

「そうだったわね。それで、どんな風に分かったの？」私は目の前の山菜料理を口に運びながら言う。

「めぐみさんは、めぐみさんの楽しみの為に僕と来てくれた。そして、めぐみさんは愛する事を楽しむ為に生きている。そう言われました。その意味を深く考えれば良いんですよね」

「そう」私が相槌を打つ。

「つまり、めぐみさんはめぐみさんの為に生きている。そこに僕は存在しない。僕の為に何かをする事はない。でも、僕には僕の為に動いて貰っているって思えると言う事は、めぐみさんのしたい事が、僕がして欲しい事と重なっていると言う事です」

「それで」私が先を促す。

「だから僕はどうすれば良いんですか？」

「嘘～。そこまでなの？」

「はい。すみません」

「あなたもあなたの為に生きれば良いって言う事よ」

「僕が僕の為に生きるですか？だったら父の為に僕が出来る事をしなくても良いって事ですか？」

「そうよ。それを春樹が今朝言ったの。あなたはあなたの為にこれから術を使うんだって。人は基本的に誰にも影響を与えられない。誰かが自分に影響を与えてって思っているのは間違いなの。自分自身がそれを望んだからそれがやって来た。だから、あなたが春樹を必要としたから、春樹があなたに引き寄せられた。そして、春樹にもあなたと関わる必要があったからあなたが春樹に引き寄せられた。それは私にも同じ事が言える。つまり、すべての人がそう言う風にしてお互いの必要なものを少しずつ共有していると言う事。すべてが自分の為に起こる現象なの」

「だったら、僕は何をしに此処まで来たんでしょう？」

「あなたの知りたい事、楽しむべき事が此処に有るからよ」

「もう少し説明して下さい」

「そうね。えっと、あなたがお父様の為にしようとしている事って何？」

「父の魂を浄化して、やすらいで貰う事です」

「あなたにとってそれにどんな意味が有るって思う？」

「僕にとっての意味ですか？それは、僕がしないと誰もする人がいないから・・・」

「だから、あなたがしようと思うのね。だったら、それを誰もしなかったらどうなるの？もちろん、お父様にとってじゃなく、あなたにとってよ」

「父がやすらいでないと、僕に影響が有るかも知れない・・・」

「つまり、あなたは自分を守る為に、お父様にやすらいで貰いたい訳ね？」

「やっぱりそれだけじゃないですよ。だって、父が可哀相だ・・・」

「可哀相だから、お父様を助けたい。そうする事で、あなたは自分も納得させられる。つまり、やすらぎを必要としているのはお父様だけでは無く、あなたもそれを必要としているって言う事じゃない？」

「そうですね。だから、僕は僕の為に此処へ来たって言う事ですか・・・」

「その通り。それをしっかり心に沈めなさい。それを今朝春樹が言ったの。あなたが明日、すべてをやり通す事はすべてあなただけの為。あなたのお父様は、お父様ご自身の為に今の状態を選んだの。それは、人の意識じゃなく魂の選択。ちょっと待ってね。春樹に尋ねるから」

私は心の中で春樹に尋ねる。『正巳のお父様と正巳の関係は？』

『何も考えずに見たままを喋れ』春樹の意志がそう言った。すると頭の中で、いつもは使っていないような場所にあるスクリーンに、映像が映った。それを私が言葉にする。

「ねえ、正巳。お父様は前にもあなたの師匠だったみたいよ。あなたとお父様は同じ事をやり直しに来てたんじゃなくかしら。時代はいつぐらいだろう？随分前だと思うけど良く分からない。山の中の掘っ建て小屋。裏に滝が有る。その時のお父様はすべて自分の為に修行してた。要するに、自分が仏になる為の修行。欲と言うものをすべて排除し、無になる為に滝に打たれたり、山を駆け巡ったりしたのよ。もともとが都の武士だったのね。それで、色んな人間関係や、主従関係に嫌気が差して、出家と言うか、世捨て人になったみたい。そしてあなたはそんな師匠のいる山に捨てられていた赤ん坊。師匠は見捨てる訳にも行かず、あなたを育てたみたい。その時もあなたは良く修行してるわね。立って歩けるようになったらすぐに師匠に付いて回ってる。あなたが十五、六の頃に、師匠が死んだ。多分随分歳をとってるから自然死だと思う。でも、あなた

にはそれが納得出来なかった。それであなたは教えてもらった術のすべてを使って師匠を呼び戻そうとした。まだ若いし、死と言うものが理解出来ていなかったのね」

「それでどうなったんですか？」正巳が興味深そうに尋ねた。

「わっ、嫌だ。作っちゃったのね」私には薄く向こうの透ける人影が見えた。

「何を作ったんですか？」

「師匠の幻。でも、魂は入れられなかったみたい。薄っぺらい人の形をしたものがゆらゆらとあなたの側に現れてる。あなた、その影響で鬼になったんだ」

「鬼ですか？」

「そう。山に住む鬼。角が生えてる訳じゃないけど、里の人々はみんな鬼って呼んでる。でも、師匠があなたを鬼にしようとした訳ではないわ。だって師匠の魂はそこに無いもの。ただ、あなたの作った幻があなたを縛り付けた。つまり、あなたがあなたを縛ってるの。まあそれはそれで良いか。その後あなたの周りには沢山の人が集まって来てる。でも、みんな鬼って呼ばれるような異端者ばかり。あなたは那些人達とたまに里に降りて女の人をかどわかしたり、綺麗な着物を盗んだりして面白おかしく暮らしてる。でも、月の無い暗闇の中で、あなたの作り出した師匠の幻に脅え続けてる」

「なんか、すごい話ですね。その時の僕ってどんな姿ですか？」

「強そうよ。体も一番大きいし、もじゃもじゃ頭に、もじゅもじゃ髭。腕なんか筋肉でもこもこしてる。でも、女の人にはとても不器用だわ。あっ、なるほど・・・」

「どうしたんですか？」

「あなたの女性恐怖症の元が分かった」

「もしかして里から連れてきた女に殺されたとか・・・」

「殺したのはその女性じゃないけど、騙されて酔っ払ってた所を里人に襲われて、全滅。つまり、鬼退治されちゃったんだ」

「めぐみさん、それって酒天童子のお伽話じゃないですか？」

「案外そう言う事実を下敷きに作られてるのかもね」

「それって本当に僕の前世ですか？」

「さぁ？分からない。春樹に言われたようにただ見えたものを言っただけよ。でも、あなたとお父様の関係は少し分かった？」

「分かりません」

「つまり、今度はあなたに本当の死を教えたいのよ。あなたが間違っって作り出した師匠の影に脅え続けたのが可哀相だったのね」

「それで、父は死んだんですか？」

「お父さんがって言ったら間違っう怖れがあるわね。お父様だった魂の意志かしら？」

「人の意志と魂の意志は違うんですか？」

「本当は同じものなの。でも、大いなる魂から別れて生まれる事によって、表層意識が出来るでしょう？それを人の意識のすべてだっって思ったら、魂の意志とは違うものに思えるの」

「父は、父だった魂は、僕に死を教える為に死んだ・・・」

「でもね、お父様のしたい事と、あなたに必要な事が重なっていたからそれが起こっているだけ。つまり、一番初めの問題に戻るの。さぁ、あなたはどうする？」

「どうしましょう・・・。つまり、出来る事をするしか無いですか？」

「多分ね」私はそう言って笑っって見せ、食事を続けた。

正巳にとってお酒と女性は自分を死に追いやった原因だ。それで、正巳はそのどちらもが苦手

なのだ。それを思うととても可笑しかった。

「めぐみさん。馬鹿にしてるでしょう？」正巳がコップに残ったビールを飲み干して言った。

「いいえ、とんでもない」私は笑いながらそう言った。そして、続ける。「今夜は襲ったりしないでね」

「分かってますよ。僕は約束を破ったりしません」ちょっと膨れっ面で子供のように言った。

その夜私達は食べ終わった食器を片付けて貰い、入り口の部屋と奥の部屋に一つずつ布団を敷いて貰って、間のふすまを閉めて寝た。

朝、未だ暗いうちに隣の部屋で寝ていた正巳が起きる音で目が覚めた。私もそのまま起き、急いで用意する。

簡単に食事を済ませ、夜が明け切らないうちに女将に挨拶をして出発した。

二十分程走った所で朝日が射して来た。空海の結界の中、真新しい太陽の光りを浴びる。気持ちの良い朝だ。

正巳は少し青白い顔で、緊張感を漂わせながら黙って運転する。

「どう？少し怖いのはましになった？」私が尋ねる。

「無理ですよ」正巳はそっけなく答えた。

「鬼と呼ばれてたあなたは、とっても強そうだったわよ」実際の正巳はやせ形で真っすぐ伸びた杉の木のような印象だ。

「僕も髭を伸ばそうかな。そうしたら強く成れるかも知れない」

「そうね。それに筋力トレーニングも必用かもね」彼の緊張を解こうと、そう言った。

「めぐみさん。僕、そんなにひ弱ですか？」子供のように口を尖らせて彼が言う。

「まさか？あなたの力が強いのは知ってるわよ。でも、鬼と呼ばれていた時のあなたは見た目からして本当に凄かったの」

「鬼ね。子供の頃は、化け物と呼ばれ、生まれる前には鬼ですか。僕って一体何ものなんでしょうね」

私は思わず笑う。「ずっと昔に生まれてた時の話よ。ただ、昨日は今の状況に一番影響を与えてる前世を見ただけだと思うわ。鬼の後にも何度も生まれ変わってる訳だし、そのどこかで私や春樹とも出会ってる。そう考えれば結構面白いわよ」

「僕、梶さんやめぐみさんと出会った事があったんですか？」

「あれっ？春樹は何も言わなかったの？」私には意外だった。

「梶さんは自分の力について何も語らなかった。修行で身につけたものに関しては良く話し合ったりしたけど……。だから前世が分かるって言うのは梶さんの口から聞いた事無いんです。だから僕の前世についても……」

「そう言えば、高校の頃から誰にも言ってないって言ってたわね。それでも、あなたは春樹の事尊敬してたんだ」

「もちろんですよ。梶さんはそんな力を持っていなくても、人を引き付ける魅力を持ってましたからね。梶さんとなると、僕は本当に楽しかったし、安心出来た。梶さんは暖かくて、強くて優しかった」

正巳はすぐムキになる。そんな所が、可愛かったりするのだが。

「随分惚れ込んだものね。春樹ちょっと出て来てあなたの大切な五十嵐君を励ましてあげてよ」私が言う。

「姉さん、また、そんな意地の悪い言い方をする。俺にはもう何も出来ない。生きていた時もたいした事は出来なかったがな。結局は俺のしたい事をしただけだ。俺は五十嵐を一人前にしたかっただけで、それは五十嵐の為じゃない。それで俺のすべき事、したかった事が終わったから今の形に変化したんだ。今の五十嵐は自分の力でそこまで育った。それだけさ」春樹が私の口を使ってそう言った。

「やっぱり、自分のしたい事をしただけだって言う事ですか？」正巳がちらっと私の方に目をやってみて言った。

「そう言う事みたいね。それより、春樹。何か注意事項は無いの？」私が尋ねる。

「そうだな。昨日の感じでは、親父も思ってた程酷い状態でも無さそうだったし、五十嵐の恐怖が押さえられれば問題無く片付くだろう」

「そんなの無理ですよ。僕はそのまま大阪に帰りたいくらい怖いんです」正巳が情け無さそうに言った。

「五十嵐、ちょっと車を止めろ」春樹が言った。

正巳はハザードランプを点けて車を路肩に止める。そして、ギアをニュートラルに戻してサイドブレーキを引いた。

春樹が私の腕を使って正巳を引き寄せる。そして、じっと目を覗き込んで言う。

「俺が見えるか？」

正巳は静かに頷いた。それを見て春樹が正巳を強く抱き締める。私の中にいとおいしい感覚が満ちて来た。

春樹が正巳の耳元で言う。「昨夜、姉さんの布団に潜り込めば良かったのに。そうすれば、何も怖く無くなった」

私は自分の力で春樹の意志を撥ね除け、正巳を離す。「馬鹿な事言ってんじゃないわよ」

春樹がもう一度正巳を抱き締める。『もう少しこうしててやってくれ』春樹が言葉を使わずに私にそう知らせた。私は仕方なく、彼の意志に従う。正巳の中に春樹が愛を流し込もうとしていた。私はその時に春樹がいつも私にしていた方法を思い出した。

「正巳。私を抱き締めて。強く抱き締めるのよ」私の意志で言う。

正巳は春樹に抱き締められながら私の体を抱く。彼の腕に力が入ったのを感じて私が言う。

「そのまま愛してるって言って。私にでも、春樹にでも良いから」

正巳が小さな声で呟く。「愛してる」

「五十嵐、もっと大きな声で言ってみろ」春樹が言った。

「愛してます」正巳は叫ぶように言って、私の体を抱き締めた。

彼の中で何か弾けるのを感じた。春樹が『後は頼んだぞ』と言う意志と暖かな感情を残してすーっといなくなる。

「正巳、苦しい。息が・・・」私は耐え切れなくなって言う。

正巳は驚いたように抱き締めていた腕を解いた。

「すみません」彼は放心状態そう言った。

「大丈夫？ちょっと乱暴な方法だったわね。でも、素敵な方法でしょう？春樹に教えて貰ったの」私はそう言って大きく深呼吸する。

「めぐみさんこそ大丈夫ですか？」正巳は心配そうに私をのぞき込む。

「あなた、本当に力が強いわねえ。でも、効果あった？」正巳に抱き締められた辺りを摩りながら尋ねる。

「分かりません。でも、少し力が沸いて来ました。あれっておまじないですか？」

「そんなものよ。愛する為の一番簡単で一番効果的なやり方。強く抱き締めて、愛してるって言うの。そうすれば、その抱き締めているものがとてもいとおしくなる。愛の波動が自分の中で発動するの。愛があれば恐怖なんて何でもない。自分の中に愛が満ちていれば、怖いものなんて存在しないのよ。多分、春樹はそれをあなたに伝えたかったんだわ」

「梶さんは愛の達人ですから」正巳が笑いながら言う。

「でも、早く恋人を作ってあの方法を手伝って貰ってね。もっと若くって元気でないと、体が持たないわ」私はそう言って車の中で体を左右に捻ってストレッチをする。

「今夜ちゃんとマッサージしますよ。僕、巧いんです」

「そう？でも、信用出来ないから」私が言う。

「ほら、また、そんな意地悪を言う。梶さんに叱られますよ」正巳がそう言って笑って見せた。その笑顔はさっきまでとは別人のように輝いていた。

「さあ、出発です」正巳はそう言ってまた走り出した。

昨日と同じ道を辿り、またでこぼこ山道を抜けて呪詛林の前に着いた。

正巳は、車を山に突っ込む様にして止める。

「僕、用意しますから、めぐみさんは暫くこのまま待ってて下さい」そう言って正巳は車を降り、車の後ろに積み込んであった大きな箱を降ろす。

『ねえ、春樹。私、どうして怖くないの？』私は目を閉じて春樹に問いかける。自分でも本当に不思議だった。初めての状況で、何が起こるかも想像出来ない。その上、正巳は母を見失った幼児の様に脅えていたのだ。

『想像出来ないのが良いんじゃないか？』春樹が答えた。

『なるほど。そっちにエネルギーが流れないのか。それに失敗してもあなたの元へ行けるだけですものね。死に対しての怖れが普通より少なくなったみたい。そっちの世界へ行ったらまた抱いてくれる？』

『嫌だよ。そんな約束したら姉さんはすぐにやって来そうだな』

『まさか？私、まだこっちでしたい事があるわ。正巳だって可愛いし、夫とだってもっと楽しみたいもの』

『そうか？でも、今の姉さんには欲が見えない。俺はもっと情熱的な姉さんの方が好きだな。でも、まあ良いか。どうしても五十嵐といると母親の感覚になってしまうんだらう』

『あなたは自分が父親だって知ってて、彼と寝たの？』

『前世と今生は別だよ。だから姉さんだってもっと激しく五十嵐を愛しても構わない』

『そんな事言ったら、あなたの存在が、私にとっても正巳にとっても大き過ぎるのよ。あなたの愛が強過ぎたから、暫くは穏やかにしていきたいの』

『癒される必要があるって言う事か？』

『ねえ春樹。私今、癒して言うのが一番判らない感覚なの』

『そうか、姉さんの場合、魂とは元々創造と破壊を繰り返すと言う事を理解してるから、修復と言う感覚が無いのかも知れないな。姉さんにとって傷つくとか消耗するって言うのは、ただの変化でしか無い。それをそのまま受け入れれば、その後の変化も当たり前の事として受け入れられるんだ。そこに癒しは無いな』

『なるほど、あなた頭良いわね』

『姉さん、余裕だな。その調子で頼むよ。それと、一つ言って置かなければならない事が有る』

『何』

『肉眼に入るものは、俺にはコントロール出来ない。多分、今日姉さんの見たくない物に遭遇すると思うんだ。出来れば、嫌だとか気持悪いだとかって言う感情は捨ててくれ。すぐに目を閉じて本質を見てくれれば、大丈夫だと思うんだが・・・』

『何だか山に入るの嫌になって来たな』

『仕方ないさ。その為に来たんだし。五十嵐がその辺の事はちゃんとやってくれるだろう。肉体界の事は生きてる人間の領域だ。それにそっちの事には訓練が必要なんだ。姉さんはそれをした訳じゃないし、すべてあいつに任せるのが一番良い。それに関しては頼りになる男だ。姉さんはただ目を閉じて魂の状態を見ていれば良い』

『簡単に言えば私にはそれしか出来ないって言う事でしょう？』

『正解』

『ところでこの山に龍は居るの？』

『龍の居ない山なんて無い。そうか！嫌な時には龍を呼べ。姉さんの嫌なものを全部食ってくる』

「めぐみさん、用意出来ました」正巳がドアを開けて私に言った。

私は目を開けて、車を降りる。正巳は簡単な祭壇を作り、様々な供え物を並べていた。

「これだけ全部用意して来たの？」私は驚いて言った。

「はい。会社潰れてもこれで食って行けます」正巳はそう言って笑った。

正巳は頭に白い布で鉢巻きをすると、手に印を結び朗々とした声で呪文を唱える。

「三山神三魂を守り通して、三精参軍狗竇去る」

そして大きく息を吸い、暫く体の中にそれを止め強く吐き出す。その所作を三度繰り返した。

正巳が振り向いて言う。「めぐみさん、悪龍封じはどうでしょうか？」

「龍に悪者がいるの？」

「一応そう言われてます」

「龍封じなんてやめましょうよ。友達を苛めるみたいで嫌だわ。でも、それをしないと危険なんだったらやっても良いけど・・・」

「難しいところですね」

『ねえ、龍。それって必要？』私は龍に尋ねる。

『どっちでも一緒だよ。君に必要な無い物は現れない』龍が答えた。

私は頷いて言う。「どっちでも良いって言ってる。正巳に任せるわ」

「分かりました」彼は頷いて見せ、暫く瞑目して九度気を発し、右手の人差し指と中指を剣のようにして、横に五本、縦に四本の線を引いた。

九字を切ったのだ。正巳は龍だけを特定せず、魔よけをしたようだ。

「めぐみさん、左手を貸して下さい」彼はそう言って私の手を取る。そして自分の息で清めた先程の二本の指で一文字を手のひらに書き、それを握らせた。

「これで道に迷いませんよ」彼が笑って言う。

「ありがとう」私も微笑んで見せ、頷いた。

「僕は少し急ぎます。一本道だから大丈夫だと思います。もしはぐれても今のが僕のいる方向を教えてくださいますから、めぐみさんは無理の無いようにゆっくり来て下さい。この山に熊はいないし、危険な動物はいませんから」正巳はそう言って荷物を背中に担いで歩き始める。

正巳はあっと言う間に見えなくなる。アーミーカラーの上下を着た、現代風の修験者と言ったところだ。私は、仕方なく、回りの自然を楽しみながら山歩きをすることにした。人の歩く道だけは何とか確保されている。正巳が道を免れない限り、迷う事は無いだろう。

木と土の香りが満ちていた。上からは木の葉を擦り抜けるようにして光りがパラパラと落ちて

来る。

途中に落ちていた木の枝を拾って杖にする。それを頼りに山道を登る。時折吹く風が木々を揺らせ、うち寄せる波のような音を響かせた。

「癒しの空間って、こんな場所の事なんでしょうね」私は立ち止まり、独り言を言った。

「呪詛林でくつろげるとは、たいしたものですな」すぐ傍で誰かの声がした。

私は辺りを見回す。しかし、誰も見あたらない。私は思い当たって目を閉じた。すると、目の前に昨日の老人が居た。

「あら、すみません。気が付かなかったんです」私は老人に謝った。

「面白いお方だ。心眼をお持ちなんですか。しかし、どこかでお会いしたような・・・」老人が言った。

「親父、俺だよ」突然春樹の意志が私の口を使って言った。

「おっ、梶君か。来てくれたのか」老人は目を細めて嬉しそうに言う。

「ああ。坊主一人じゃ心配だから、この人についてきてもらったんだ。ところでどうしたんだ？」

「もう、終わろうと思ってな」老人は目を伏せ、ため息混じりに言った。

「そうか。しくじった訳じゃなかったんだな」春樹が念を押すように言う。

春樹は老人の事を師匠だと言っていたが、師匠と弟子という関係よりも、もっとラフな付き合いだったようだ。

「ちょうど良い機会だったし、わしももう疲れた」

「結界はどうした？」

「守れているはずだが？」

「それなら良い。坊主は？」

「正巳はわしに気づかずに岩座へ登ったよ。多分、もうじきわしの抜け殻を見つける頃だ」

「それは助かった。この人に嫌なものを見せたくない」

「梶君の愛人か？」

「そんなもんだ。それより、どうだ？肉体を捨てるって結構良いもんだらう？」

「そうさな。腰の痛いのも癒えたよ」

私が二人の会話に割り込む。

「あなた達、そんなのんびりしてて良いの？大体二人とも正巳の親の癖して、こんな時に雑談してる場合じゃないでしょう」

老人が目を丸くして驚いていた。

「梶君、これはどうなってるんだ？」

「親父、この人凄いんだ。まあ説明は後にして、坊主を追うか？」

「いや、この人に見せたくないんだったらもう少し待った方が良い」

「どう言う事？」私が尋ねる。

「姉さん、腐りかけた死体なんて見たくないだらう？」春樹が言う。

「今朝言ってたのがその事だったのね。出来れば見たくはないけど、正巳一人に押し付けるのも何だと思うわ」私が言った。

「姉さんは五十嵐に対して優しいな。まあ姉さんが良いんだったら行こうか。親父案内を頼むよ」

「それなら、ついて来るが良い」そう言って老人は私の前に立って歩き始めた。

歩きながら春樹は老人に、自分が私の中に存在するようになった経緯を告げる。老人は、驚きながらそれを聞いていた。そして最後に言った。「それも一つの在り方か・・・」

初めは人が歩ける程の道があったものの、途中からはそれも定かではなくなり、森の中の下草をかき分けながら登る。そして、それまでで一番急な坂を登りきった所に少し広くなった場所があり、一畳程の広さと、一メートル程の高さを持った長方形に近い形の岩座があった。その岩に覆いかぶさるように、早咲きの桜が満開の花をつけていた。そこまで一本も花をつけた桜など無かったので、私は本当に驚いた。

「桜・・・」 そう言ったまま、華を見ながら立ちすくむ。

気を取り直して視線を移すと、その木の根本に随分汚れてはいるが、白い布があるのが見えた。目を凝らして良く見ると、それは白い装束を身につけた人だった。つまり、さっき春樹が言った死体。風向きのせいか臭いはしなかった。

私は回りを見回したが正巳を見つける事は出来なかった。

「正巳が居ないわ」私が言う。

「迷ったか？」老人が言った。

「だったら、私の手が教えてくれるって言ってたけど、どうすれば分かるのかしら」私はそう言って老人の前に手を広げて見せる。

「それなら、その手を握って前に出し、正巳の事を思って下さい」

私は言われたとおりに、拳を前に突き出し、正巳の姿を思った。するとその拳を誰かが引っ張る。私はそのまま引っ張られる方向へ歩き始める。私が登って来た方向とは反対の方へ導かれる。そこは十メートル程の崖になっていた。私はその崖の上から下をのぞき込む。下の方の木の間に動くものが捕らえられた。

「正巳！こっちよ」私が大声で叫ぶ。

それは動きを止めた。

「めぐみさん！」正巳の声だった。

「何してるの！お父様はこっちよ！」

「すみません」そう言いながら崖の下までやって来た。

「ずっとこっちへ回り込めば登れるわ」私は自分が登った方を指さしながら言った。

彼は首を振って見せると、黙って足場を探しながらそこを登って来た。私は崖の上からそれを見ていた。

正巳は崖を登り切ると両手についた土を払う。そして顔を上げ、ニッと嫌な笑い方をした。

『違う！』と言う自分の感覚と共に『逃げろ』と春樹の意志を感じた。しかしその時正巳の腕が私の腕を捕らえていた。そして逃げようとする私を後ろから羽交い締めにする。

一瞬噎せるような嫌な臭いがした。彼の太い腕が私の喉元を締め付ける。私は必死で抵抗するが、それを振りほどく事は出来なかった。息が出来なかった。何がなんだか分からないまま私は正巳に殺されようとしていた。

次の瞬間『それでも良いか』私はそう思って抵抗をやめた。しかし、首を絞めている腕は、それ以上締め付けもせず、緩めもしない。

私は何故正巳に殺されるのだろうか？正巳はどうしてしまったのだろうか？薄れ行く意識の中でそう思った。

「逃げて下さい。めぐみさん、逃げて」微かに正巳の意志が感じられた。これ以上締め付けられないのは正巳が必死で抵抗しているのだと思った途端、最後の力を振り絞って肘を強く引き、その反

動で拳を自分の耳の後ろに突き出した。そのどちらもが幸運にも相手の体に当たった。少し緩んだ腕から、身を屈めて抜け出し、そのまま前へ走った。

「無駄だ」すぐ後ろから気味悪い声が聞こえた。

私は磐座に阻まれてそれ以上逃げられない。

『姉さん、登れ』春樹の意志が言った。私は神の座に登るのをためらっていた。

『良いから登るんだ』春樹が私をせかす。

私は覚悟を決めてそのままその岩に這い上がり、振り返った。正巳の体を着た何物かが、岩座の横を通り過ぎた。

「どこへ行った」その男がそう言いながら私の乗った岩の回りを回る。先程道案内してくれた老人の姿はどこにも見えなかった。

正巳の体を着た何者かが反対側で老人の死体を蹴飛ばす。腐りかけた死体が大きく崩れた。それを見て私は吐き気に襲われた。『見るな。目を閉じるんだ』春樹が言った。

私は目を閉じて吐き気を押さえる。何も見えなかった。いや、目を閉じたにもかかわらず、真っ白な光りで目が眩んだという感じだった。多分、そこが神の御座で、神の光に満ちていたからだろう。私は神の光の中にいる事で、龍を呼ぶ事など思い付きもしなかった。

その時どうしても神の御座の上を汚したくなかった。幸い食べたものは消化されていたらしく、胃液だけだったので、何とか押さえる事が出来た。

『悪霊にこの場所は見えない』私の吐き気が治まったのを感じて、春樹が言った。

『でも、このままだと逃げられないわ』私は言う。

『神が神の御座に降りたんだ。何でも出来るさ』春樹が私を落ち着かせるようにそう言った。

『降りたんじゃなくて登ったのよ』私もそう言って気を落ち着かせる。

『親父の奴、失敗してやがった』春樹がしょうがなさそうに言った。

『どうするのよ』私が尋ねる。

『姉さんはどうすれば良いと思う？』

『私は、あのまま正巳に殺してもらえば良かった』

『そうも行かないさ。姉さんは逃げられた。つまり、まだその時が来てないって言う事だ』

『でも、此処から降りられなければ同じじゃない』

『それもそうだ』

『ところで、どうなってるのか説明してもらえない？私には知る権利があるような気がするんだけど』

『相変わらずだな。怖いもの無しだ。まあ良いか。多分、親父が此処の悪霊の親分みたいなモノに魂を食われたんだな。それで、姉さんをまんまとおびき寄せた。さっきまで俺としゃべってたのは傀儡だったんだ。いや、もしかしたら親父自ら受け入れたのかも知れないが……。それも一つのやり方だ。抵抗しなければ、何も辛くは無い。要するに、ドラキュラはドラキュラを恐れないって事だ』

『面白い譬えね』

『五十嵐に取り憑いてるのが多分本体だ。あいつが抵抗してなければ一発で首の骨を折られてただろう。まだ、いくらかでもあいつの意識が残ってる証拠だ』

『まだいくらかでもって、すぐに無くなるって言う事？』

『ああ。焦りと恐怖が強すぎた』

『あなたにはどうしようもないのね』

『そう言う事。此処で姉さんと心中だ』

『あなた、もう一度死ねるの？』

『俺の活動の場を失って無に帰る。姉さんも今の魂の状態ならきっと無に戻れるだろう』

『どう言う事？』

『つまり、自分の死も、それを与えるものも、ありのままに受け入れられれば何も残らない。しばらくの間だ姉さんの旦那の元に幻が残るぐらいだ。それも、そんなに長い間じゃないだろう』

『そう。でも、良かった。桜を見上げながら死ねるのね』

私はそう言って岩座の端まで行き、桜の華を見上げた。そして、そのまま上を向いて寝っ転がる。自分の頭のすぐ下に崩れた死体があり、自分の乗っている岩の回りを悪霊がぐるぐる回っている。そんな状況の中でも、私は、華を見上げていた。

「願わくば、華の下にて春死なむ・・・」声に出して言った。

華がざわっとざわめき、花びらが一斉に散った。

「この如月の 望月の頃」もう

一度華がざわめき、花びらを散らせた。

西行法師の残した言魂は今も力を持っているようだった。

無情にもその華は美しかった。なにもかもが華に吸い取られて行くように感じた。時が止まり、また流れる。実際には、悪霊に取り憑かれた正巳が、ウーウーと唸りながら、ドスンドスンと音を立てて回りを歩いているにも関わらず、私にはただ花びらの舞う音だけが聞こえている。

「めぐみ、どうしたの？」

夫の、いや、元夫の声と顔が頭に浮かぶ。

「姉さん。愛してるんだ」

そう言って強く抱き締めた春樹の暖かさも。

「めぐみさん。僕怖いんです」

そう言った正巳の脅えた表情も浮かんだ。私は脅えた正巳を抱き締める。

「ほら、大丈夫よ。何も怖くなんて無い。良い子ね。大きくなったらきっと強く成れるわ」

いつの間にか六歳の正巳を抱き締めていた。柔らかな髪と、すべすべした張りのある肌。日なたの匂いが鼻をくすぐる。六歳の正巳は小さな手でしっかりと私を掴む。なにもかもが可愛らしかった。いとおしくて堪らない。私は涙を流しながら彼を抱き締めた。

「ごめんね。何もしてあげられなくて。やっぱりおばさんにも、少しの間一緒に歩いてあげる事しか出来なかったね」

私はそう言って泣いていた。春樹を失った時のように体を折り曲げて激しく泣いた。

長い間岩の上で泣き続けた。そして泣き疲れた頃、周りを回っていた気配が消えていた。そして、私が横向きに体を丸めて泣いていた目の前に手が見えた。

『姉さん。手を取ってやってくれ』春樹の意志が聞こえた。

私は腕を伸ばしその手を掴む。そして這い寄って岩の上から下を覗き込んだ。

正巳が岩に縋り付くようにして倒れ込みながら腕を伸ばしていたのだ。

「正巳！正巳！大丈夫？」私は大きな声で名前を呼ぶ。正巳はそれに答えない。

私は彼の名前を呼び続けながら、手を掴み直し、渾身の力を込めて引っ張りあげた。自分にそ

んな力があるなどとは思えないような馬鹿力だった。正巳の体がズルズルと持ち上がり、何とか岩の上に上半身だけ引き上げる事が出来た。私は正巳のもう片方の腕も取り、足で踏ん張りながらベッドに寝かせるような感じで斜めに引っ張る。そして最後に足を片方ずつ持ち上げて、全身を乗せる事に成功した。

私は疲れ果てて彼にもたれて座り込む。

「筋トレが必要なのは私の方だったみたい」大きく息をしながら独り言を言った。

「ありがとうございます」正巳の声だった。

「戻ったの？」私が尋ねる。

「すみません」正巳が小さく言った。

「岩座に登れるって言う事は悪霊じゃないわね。でも、随分消耗したわね」

「大丈夫です。すぐに回復出来ます」彼はそう言って仰向けになると、目を閉じ、呼吸をコントロールし始めた。大きく吐き、何秒か止め、そして素早く吸う。それをいくつかのパターンで繰り返し、最後に寝たまま早九字を切って上体を起こした。

「ほら、もう大丈夫です」そう言って泣いた為に汚れた私の顔を指で拭った。そして声を立てて笑う。

「すみません。余計に汚れちゃいました」

私はポケットからハンカチを出して顔を拭く。そしてそのハンカチで彼の顔も拭いた。

「あなたも泥だらけよ」

彼は自分のジャンパーの袖で乱暴に顔を拭う。そして、私を抱き締めて言った。「愛してる」

そのまま静かに横になり、体を重ねて優しく口づけをした。私は前の時の様に抵抗はしなかった。確かに、それはいとおいしい正巳だったからだ。彼は口づけを終えてそっと体を離れた。

「神の御座で不謹慎よ。罰が当たるわ」私が言う。

「かまいませんよ。どんな罰でも、めぐみさんがいれば怖くない」そう言ってもう一度私を抱き締めた。そして岩の上で立ち上がって言う。

「仕事をしてしまわないと・・・」そう言って岩座から飛び降りた。

私も岩座を降り、傍の木にもたれ掛かって座り込み、正巳の行動を興味深く見ていた。

彼は自分が担いで来ていた荷物を拾うと、その中から反物になった白い布を取り出して、崩れてしまった父親の死体を幾重にも丁寧に包む。

「オン サンマユカン マカサンマユカン オン サンマユカン マカサンマユカン・・・」呪文を唱えながらとても手際よく、それを終えた。その間私は般若心経を口の中で唱えていた。すべてが無であり、すべてが有であり、汚れもなければ、清くも無い・・・。

彼は父親の遺体を担いで坂を降ろし、林の中の土の柔らかそうな場所を選んで小一時間かけて穴を掘った。そこに自分が先に下りていとおしむように父親を抱き、静かに穴の中に降ろした。そして般若心経を唱えながら少しづつ土を手にとって掛け、埋め戻した。

最後に、ペットボトルに入れて持って来ていた水をかけ、印を結び、真言を唱える。

「アビラウンケン アビラウンケン アビラウンケン」

また違う印を結び直し、違う真言を唱える。

「オンサラバサラサタノウシャン オンサラバサラサタノウシャン オンサラバサラサタノウシャン」

その後もずっと口の中で真言を唱え続けながら祈念していた。

そして、もう一度坂を登って岩座を丁寧に清め、大きく拍手を打って、礼拝をした。その間、華がちらちらと舞い降りていた。

すべてが終わったのは日が随分傾いた頃だった。

「めぐみさん。急がないと山で野宿ですよ」からはそう言って私の手を取り、山道を歩く。

「もう、迷わないで戻れそう？」私が言う。

「大丈夫。任せて下さい」

私は彼に手を引かれながら細い山道を急いで下りた。

山の入り口にしつらえた祭壇の前で、彼はもう一度呪文を唱え、しっかりと封印を施す。そして、祭壇を取り払い初めの状態に戻した。

日が暮れる前に私達は何とか県道まで戻る事が出来た。

「めぐみさん、どこかでもう一泊しましょうね。僕、ちょっと疲れました」

「そうね。それが良いわ。朝食べたつきりで、何も食べて無いし、体もくたくた」

「すみません。今度からお弁当を用意しますよ」

「こんなのは今回限りで御免蒙りたいわ」

「そう言わないで下さい。周りの人に手伝ってもらえって自分で言ったんですよ」

「それは会社の事でしょう？」

「どっちも一緒ですよ。それに、めぐみさんがまたやりたくなったらするしか無いでしょう？」

「やりたくならない事を祈りましょう」

正巳は県道から国道に戻り、高速道路に入った。

「琴平で泊まりましょう。そうすれば帰りが近いから」

「それが良いわ」私もそれに同意する。

「でも、ゆっくりしたいから、部屋は二つ取ってね」私が続けた。

「どっちでも一緒ですよ。同じ部屋じゃなくても、僕は忍び込みますから」

「あなた、忍者の術も使えるの？」

「修験道の術も、忍者の術も、元はおなじものですから」そう言って笑って見せた。

次のパーキングエリアで車を止め、取り敢えず二人とも顔と手を洗った。その後、正巳は琴平の観光温泉ホテルに電話で空室確認をし、そのまま予約した。ウィークデイなので、どこも空室を持っているのだろう。

「そんなに良い温泉じゃないけど、普通のお湯よりましですよ」正巳が言った。

「有馬の温泉旅館の息子にすれば、たいていのお湯はたいした事無いんでしょう？」

「そんなとこです」

琴平に着き、正巳は、動物的カンで目的のホテルを見つけ、車を止めた。

彼はロビーで空いている部屋のタイプを尋ね、一番眺めの良い部屋を私の為にもう一室選んだ。

私達はすぐに部屋に案内してもらい、とにかくお風呂に入る事にした。

大浴場には誰もいなかった。私は汚れを祓うために、髪と体を丁寧に洗う。その時に鏡を見

ると、首の辺りと、背中の中身に赤黒い痣が出来ていた。タートルネックのTシャツを持って来ていて良かったと思った。その後、ゆっくりと湯船で体を伸ばす。今日一日の事が夢の中の出来事のように思えた。そして、おかしな事に、やっと少し怖くなった。

『かなりズレてるな』私は心の中で笑った。

部屋に戻ると正巳がソファで居眠りをしていた。座敷の方には食事の用意が出来ている。

「先に食べちゃうわよ」私は彼の傍に寄って小さく言った。

「僕も食べる」子供のようにそう言って彼は勢いよく起き上がった。

二人でビールを注ぎあって乾杯をする。

「お疲れさまでした」正巳はそう言って笑って見せると一気にそれを煽った。

「酔っ払うわよ」私が言った。

「大丈夫。女の人も恐く無くなってきたし、きっとお酒も大丈夫です」

「あなたの会社で言う前世療法？」

「そんなものです」

「でも、体質はそんなにすぐには変わらないと思うわよ」

私はそう言って料理を口に運んだ。

「めぐみさん、首に痣が・・・」正巳が申し訳なさそうに言った。

「背中にもついてたわ。あなたの力が強すぎるのよ。でも、気にしないで良いわ。明日はタートルネックのTシャツを着るから。でも、あなたは大丈夫？昔習った護身術が役に立ったんだけど・・・」

「そう言えば、僕めぐみさんに殴られましたよね」

「そう、たまたま当たったからうまく逃げられたの。そう言えば殴ったこぶしも少し痛いわ」

「僕の方は全然何とも無いみたいです。本当にすみません。僕があんなものに取り憑かれたりしたから・・・」

「私って、本当におかしいのよ。あの時には、全然恐く無かったのに、お風呂で体を伸ばした途端に恐くなったの。すごいズレ方よね」

「持って生まれた強さですね」

「鈍いだけだと思うわ。でも、結局何がどうなったのか教えてくれない？」

「はい。僕が一人でどんどん行ってしまったのが間違いの始まりでした。出来れば、先に父の死体を見えなくしたかったから・・・」

「そうね。春樹もそれを心配してくれたの」

「でも、途中で、あの悪霊に出会ってしまった。僕は早く行こうとして前しか見てなかったから、注意が足らなかったんです。あいつはドカンと真上から襲って来て、何がなんだか分からないうちに僕の中に入り込んでしまった。もっと注意深くしているべきだった。朝樞さんとめぐみさんにあんなに愛を分けてもらってたのに・・・」

「しょうがないわよ。あなたの体質ですもの」

正巳は首を振って続ける。「奴らは、あの岩座のあった場所に入れたいんです。それで、僕はずっとあの岩座のあった場所、つまり祭祀場の下を回り続けていた。そこにめぐみさんが声をかける事によって道を作ってくれたから、そのままあそこまで登れた。あの悪霊は、あそこに捨てられた沢山の人々の汚れが固まって意志を持ったものなんです」

「捨てられたものが集まって、一つの意志を持ってしまったの？」

「そうです。それが形代を求めていたんです。そこにそれに最適な僕が通りかかった」

「悪霊に取り憑かれるってどんな感じなの？」

「そうですね。譬えて言えば体中の血が入れ替わる感じですかね。一気にそれまでの自分が流れ出してしまって、全く異質なものが満ちて来る。悪霊の場合、堪らなく苦しくて、悍ましくって、悲しくって、痛くって……。要するに人が感じる嫌な感覚が固まりになって押し込まれるような感じです」

「辛そう……。でも、普通の憑依の時はそんなじゃないんでしょう？」

「そうですね。悪霊は、嫌なものが集まって出来たものですから。梶さんだと、暖かなエネルギーが満ちる感じですよ」

「あなたはそれを拒めないの？」

「それをする為に修行したんですけど……。まだまだ足りないみたいです。すみません」

「多分、修行が足りないせいじゃないと思うわよ。あなたは自分を信じる事を学ぶ必要があるんだと思うの。いくら体を苛めても、自分が信じられないと根本が揺らぐもの」

「それが愛ですか？」

「そう。つまり、愛って言うのは、相手の為のものじゃないのよ。相手を愛する事によって自分が一番気持ち良くなるものなの」

「それでめぐみさんは、梶さんがめぐみさんを愛しているのと、自分が梶さんを愛しているのは関係ないって仰ったんですね」

「そう。私は春樹に愛される事によって、愛する方法、手段を習ったの。そして、愛するって言う事は、相手を所有するのでも自分が相手の為に働く事でも無いって分かった。ただ、愛する。それで良かったのよ。相手をありのままに受け入れるだけ。何も否定する事なんて無いの」

「そのお陰で今日僕は救われました。めぐみさんは、悪霊を恐れもしなかったし、否定もしなかった。首を締めて殺そうとしたけどめぐみさんの恐怖は大きくならなかった。それどころか、途中でそれは小さく成って消えてしまった。死をただの出来事としてそのまま受け入れてしまったんですね。僕も力を振り絞って抵抗した。あんな事が出来るなんてそれまで知らなかった……。いつも僕に降りたものを見ているだけでしたから。でも、どうしても僕はめぐみさんを殺したく無かったから……。けど、それ以上力を入れないようにするのが精一杯だったんです。悪霊は焦っていた。あいつらは恐怖が大好きで、それを糧にしているんです。生き物は殺される時に一番大きな恐怖を感じるから。でも、めぐみさんはそうじゃなかった。そして、見えない場所に逃げてしまった。つまり、神の御座へ入ってしまったんです。僕は執念深く捜し回っていた。他にする事を何も思いつかないんです。ただ、見つけようと言う意志だけで。でも、あいつらに神の御座は見えないし、感じる事も出来ない。その頃には僕とあいつがほとんど同化していた。同化と言うより、僕の中の恐怖や焦りを奴が利用していた。つまり、類が友を呼ぶって言う奴ですよ。だから、結局僕が奴らを呼び、奴らが僕を呼んだって言う事だ」

「お互いに必要としていただけよ。人と人でも同じ事だわ。もし、あなたがあの時、抵抗しないで私を殺していたらどうなっていたと思う？」

「めぐみさんを殺していたらですか？最悪ですよ……」

「でも、もしそうになっていたとしたら、私はそれまでの命しか持って無かったって言うだけの事なの。必死で抵抗してくれたあなたには申し訳ないけど、私にとってはどっちでも良かった。つまり、死んでいれば、そのまま春樹に抱いてもらえた訳だし……。だから恐怖を感じなかったんだと思う。けれど、私はあなたのお陰で生き延びた。つまり、私の命はまだ続いてたって言う事ね」

「それがありのままを受け入れるって言う事ですか？」

「多分」

「だったら、僕はあの悪霊もありのまま受け入れれば良かったって事ですか？」

「ある意味ではね。もし、あなたがあの時完全に悪霊を受け入れていたら、私は首の骨を折られて即死だった。そうしたらあの美しい桜を見上げながら春樹の元へ行けた。でも、あなたの恐怖や焦りが無かったら、憑依自体が起こらなかったかも知れない。もし、あの時あなたが悪霊に取り込まれてしまう事を望んでいたなら、きっと立派な悪霊が出来上がったでしょうね。けれどその時には、あなたは立派な悪霊で、人を殺す事は楽しみでしか無いから辛くも無いし後悔する事は無い。どこにでも楽しみはあるって言う事よ。でも、今の状態を考えると、そうではなかった。結局あなたの魂は、取り憑かれた後、それから逃れると言う状況を欲していたんじゃないかしら？だから、今日起こった事はすべて完璧だった。あなたが悪霊に憑かれた事も、私を殺しかけて止めた事も、ちゃんとお父様を葬った事もね。私の言っている事判る？」

「何となくです」

「あなたは今日の出来事から何を学べたと思う？」

「自分の弱さですか・・・」

「自分を否定するのはやめなさい。でないと本当に自分がしたかった事が見えにくいの」

「でも、僕は大好きなめぐみさんを殺しかけたんですよ。最悪です」

「あなたはまだ、他人に関われるって思っているのね。あなたが私を殺していたら、私はあなたに殺される為にわざわざあの場所まで行っただけの事なのよ。つまり、それも私の意志。これは、普通の人に言っちゃ駄目よ。特に犯罪の被害者にはね。その人達はそれで引き寄せられる感情を学んでいるんだから。傷ついた者に追い打ちをかける事に成りかねないでしょう？その人達にとっては、怒りや、憎しみを利用した癒しであったり、会社を動かす原動力であったりするの。でも、今の私とあなたの間なら、間違いなく私は私の意志で生きもするし、死にもするって事よ。私、あの時、あそこであなたに殺されるのも悪くないって思ったのよ。それに、やっぱり春樹の元へ行きたいって言う気持ちがどこかにあるんだと思う。死んだって行ける訳じゃないのね。生きてるからこそ春樹と一緒に居られるのに。それが私の大好きな、人の持つ弱さ。私は彼が死んでいることによって普通以上に死を恐れなくなった。つまり、あなたが私を殺すなら、殺される私も共犯者。あなたが私を殺した後、悪霊になってしまうなら、それはあなたの選んだ一つの形。途中で人に戻れて、後悔するなら、それもまたあなたの選んだ生の形。それだけの事。私ってとても冷たい人間ね」

「めぐみさんはそんなに何もかも理解しているのに、なぜその真理を捨てて、人の弱さを持ち続けようとするんでしょね」

「真理を知る事と、その真理に沿って生きる事は違うの。私はこの肉体を持って生まれ、この肉体に宿った心を持ち、生きる事を選んだのよ。だから、私は神にも仏にも成りたくない。どうしようもない人間の女でいたい。どんな真理を理解しようと、悲しみに出会えば悲しみ、苦しみに出会えばうめきながらそれに堪える。それでいいんだって思うの。だって、肉体が無ければ、それらは無いのよ。私達はそんな貴重なものを持っているの。それが肉体であり、感情であり、心なの。私はそれらを喜ばせたい。そうする為に一番良い方法が愛するって言う事だった。だから、私はそれを求めて生きているんだと思う」

「篠田さんとのチャネリングでおっしゃっていた事ですね」

「そう。どんな悲しみも、悲しみとして受け入れるって宣言したのよ。そして、うまく泣けなかった私に春樹は泣き方も教えてくれた。だから、私は今日もあんなに上手に泣けたのよ」

「そう、桜が音を立てて散った途端に、僕に取り憑いていた悪霊が泣いたんです。不思議だった。僕の中で悪霊がオーオーと声を上げて泣いた。僕には何が起こったのかも分からなかった。でも、その泣き声を聞いているうちに、神が泣いているって思えた。そして悪霊も神とともに泣いているんだって。とても変な話なんですけど、その時は、早く行って抱き締めてあげなきゃって思ったんです。神が泣いてる。僕が抱き締めて慰めないといけないって。そうしたら、悪霊がいなくなった。憑いていたのが離れたんじゃなく、声を上げて泣きながら解けて行った。そんな感じです。僕の大切な人が泣いている。僕はいつも愛されて来たのに、僕は誰も愛していない。そんな風に思えた。そうしたら、岩が見えたんです。神の座であるあのドルメンがやっと見えた。そして、神がそこにいる事も感じた。でも、僕はその神に救われいと思ったんじゃないかった。とても驕った感覚ですけど、神を慰めるんだって思ったんです。そうしたら、暖かい手が僕を掴んで引き上げてくれた。その時はもう悪霊はどこにもいなかった・・・」

「素敵な事を学んだのね。あなたは自分の内にある愛を見つけたのよ。それがきっと育って行くわ」

「その為に僕は今日あの体験をしたんですか？」

「認めてしまいなさい。何も否定する必要なんて無いのよ。あなたはとても素敵なものを見つけた。そして、私も素敵なものをまた一つ拾った。とても素敵な一日だったじゃないの」

「どんなものを拾ったんですか？」

「六歳の頃の可愛い正巳君を抱き締めて泣いたの。日なたの匂いがして、暖かくって、つるんとしていて、小さな手で私にしっかりとしがみついていた。子供を持たない私には、とても素敵な体験だったわ」

「僕を抱き締めて泣いていたんですか？」

「そう、結局私も少しの間一緒に歩く事しか出来なかったのねって言いながら」

「それが空海。めぐみさんの理解した空海の意志」

「きつとね。でも、私は空海のようにそれを沢山の人の人に広げる事は出来ないわ。ただ、特定の人。つまり、あの時には、六歳のあなたただただけ。でも、とても心が暖かくって、心地良かった。つまり、『あなたが私の愛のスイッチを入れてくれた』そう言う事だと思うわ」

彼は頷いて見せた。

私達はそんな話をしながら食事を終えた。結局正巳はビールを一人で三本飲んでしまったが、少し赤くなっただけで、平気な顔をしていた。本当に前世治療は効果があるようだ。

フロントに電話をかけて、食べ終わった食器を片付けてもらう。彼は自分の部屋へ戻った。私はいつもならもう一度入浴するのだが、浴場で他の人に痣を見られるのが恥ずかしかったので、そのまま暫く部屋でくつろいだ。

元夫に電話をする。

「もしもし」

「めぐみか」

「うん」

「どうだった？五十嵐君のお父さんは見つかった？」

「ええ、見つかったわ。でも、死体だった」

「そうか。君も見ただの？」

「ええ。でも、正巳が一人でちゃんと葬ったわ。山の中で一人で死んでた」

「大変だったね」

「平気よ。悲しいのは私じゃなくて正巳の方だもの。今日は二人とも疲れたから琴平に泊まっているの。明日には帰るから、帰ってから色んな事聞いてね」

「良いよ。じゃあ、ゆっくり休みなさい」

「そうするわ。おやすみなさい」

「おやすみ」元夫はそう言って電話を切った。

私は少し早いけど、布団に入ろうと思って立ち上がる。その時にドアがロックされた。

「はい」私はそう答えて扉のそばに行く。

「五十嵐です」正巳だった。

私はドアを開けて「どうしたの？」と尋ねる。

「もう少し一緒に居て貰えませんか？」

「寂しいの？」私は笑いながら言う。そして、ドアを大きく開けて言う。「どうぞ」

「すみません」彼はそう言って入って来た。そして、そのまま冷蔵庫を開けてウイスキーの小瓶を取って部屋の一番奥のソファに腰掛けた。

「まだ飲むの？」私が尋ねる。

「良いですか？」

「かまわないけど、明日二日酔いだったら私が運転することになるのよね。出来ない事は無いけど、多分、あなたが恐怖で固まってしまうと思うわよ」

「大丈夫です。ちゃんと僕が運転しておうちまで送りますから」

「だったら良いけど。でも、どうしたの？」

「僕、お礼がしたいんです」

私は首を傾げる。正巳はウイスキーのビンをそのまま口に当てて喉を鳴らして一気に半分ぐらい飲んで、言う。

「僕に梶さんを降ろして下さい。僕はこのとおり、随分飲んでますから、きっと何も覚えてません。それに、僕もめぐみさんも目隠ししてたら梶さんしか見えないし、僕にめぐみさんは見えないですから。めぐみさんは本当に梶さんを求めている。僕は今、それを与える事が出来る。いつも梶さんは、好きな女の人にその人の本当に望んでいるものを与えるのが男だって言っていました。それが出来るのにしないのは男らしくないって。僕、本当は・・・」

正巳はそのまま寝入ってしまった。

私は呆れて春樹を呼ぶ。「春樹。正巳に降りられる？」

三分程で何事も無かったように正巳が首を上げ、人懐っこい笑顔を見せた。

「姉さん。久しぶりだ」

「何がよ。いつも一緒に居るくせに」

「そうじゃない。二人が別れて存在するのが久しぶりだって言ったんだ」

「そう言えばそうね。でも、正巳は大丈夫？」

「こいつ、面白い事を考えたな。でも、せっかくの好意だから俺は受けるべきだって思うんだが、姉さんはどう思う？」そう言って、彼は残っていたウイスキーを飲む。

「体は正巳なんだからそんなに飲まないで。急性アルコール中毒なんてみっともないわよ」

「大丈夫。こいつ本当は飲める体なんだ。でも、自分が飲む事を否定していたから、飲めなかっただけ。昨日の前世の話で本当にアルコール拒否症はほとんど治った。とにかくそんなところに立ってないでこっちへ来いよ。ずっと抱いて欲しかったんだらう？五十嵐を見たくないんだしたら

、電気を消せば良い」

「勝手な事言って」私は文句を言いながらも、彼が言ったように明かりを消して、彼の後ろに回り、両手を回して彼を抱いてみる。

「どっちだと思う？」春樹が言った。

「正巳」

「俺じゃないか？」

「ええ。この手触りは正巳だわ」

「気分が乗らないか？」

「どっちでも良いような気になってる。だって、私、あなたも正巳も好きだから」

「それで良い。こいつに聞かせてやりたかったな」

「聞いてるんでしょ？」

「残念ながら、酔っ払って眠ってる。こいつ部屋で一気に一本空けて来てるんだ。その上、これを半分飲んだ。俺だってそれだけハイピッチで飲んだら少しは酔うさ」そう言ってウイスキーの瓶を持ち上げて、笑った。

「練習が出来て無い正巳にはここまで来るのがやっとだったって事かしら？」

「そうだろうな。でも、アルコールの処理能力はちゃんと有るから、大丈夫だ。朝、ちょっと頭が痛いかもしれないが、まだ若いから平気だろう。俺だって、こいつぐらいの年の頃は良くやった。でも、姉さん水をくれないか？ちょっと薄めといてやろう」

私は彼にコップ一杯の水を差し出す。彼は、それを一気に飲んで、もう一杯おかわりを求めた。私はそれにまた注ぐ。結局三杯の水を飲んでコップを置いた。

「あなたも結構優しいところがあるのね。」私が言う。

「姉さん程でも無いがな」そう言って彼は私の手を取って抱き寄せ、口づけをした。そして、強く抱き締める。

「姉さん。今日はありがとう。本当にいい女だ」抱き締めたままそう言った。

「それはどうもありがとう。でも、少し力を緩めてくれない？そこ、痣になってて痛いの」

「それは、悪かった」そう言って春樹が力を緩める。

「でも、あなた、随分私をサポートしてくれたのね。でなきゃ本当に今頃はそっちの住人だった」

「自分の力だよ。俺の存在だって姉さん自身なんだから

「そうね。だったら、私が私を抱きたいって思ってる訳だ」

「そう言う事。でも、こいつちゃんと出来るかな？」

私は笑う。「そんなに飲んだんだったら多分無理だと思うわよ。私はそれでも全然平気だけど。本当は今夜誰かに添い寝して貰いたい気分だったの。でも、正巳にそれを頼むのはちょっと恥ずかしいし。だって、嫌なもの見ちゃったでしょう？一人で寝るのはちょっとね。だから、ちょうど良かった。今夜は一緒に寝てくれる？」

「あいつに頼めば良かったのに。そしたら、あいつも二日酔いにならないですんだ。でも、たまには良いか。それも大切な経験だ」

「でも、あの桜綺麗だった」

「ああ、あれは神の桜だ。人々の思いを吸い込んで、毎年花として咲かせ、それを散らすことによって浄化する。『さ』とは神の事だ。そして『くら』は座で、神の依り付く所。つまり、さくらは神の依り代として昔から大切にされて来たんだ。それであそこにも桜が植えられて居た。神のための清浄な場所があり、その回りに悪いものを捨てる。そうすればいつか神によってそれ

らが清められるって考えた。でも、姉さんの中には何か特別なものが在ったな」

「ええ、多分。きっと桜の下で死んだ事が有るのよ。でも、今それを知る必要は無いわ。だから、思い出さない」

「それで良い。桜の下で泣いてた姉さん、とっても綺麗だった。惚れ直した」

「あなたのお陰で、随分上手に泣けるように成ったでしょう？でも、正巳がびっくりしてたけど」

「そうだな。神にあれだけ激しく泣かれたら、悪霊だって悲しくなるさ。そして悪霊が泣けば、悪霊で無くなる。それも一つの法則だ。人が本来持つてる浄化作用のひとつだ。悪霊だって元は人だからな」

「そんなものなんだ。でも、泣きながら出てくる幽霊もいるんでしょう？」

「手放して泣いているのに会った事は無いな。感情を純粋な悲しみに変化させ、泣く事によってそれを昇華すれば、悪い感情は残らない。つまり、幽霊にならないんだ。純粋に悲しまないから、それが溜まって行く。ワンワン泣いてる幽霊って恐くないだろう？」

「それもそうね。でも、ワンワン泣いてる神って言うのもね」

「神は人として現れる。神とはスサノヲがそうだったように激しく怒り、激しく泣くものだ。それに姉さんは神座に乗ってた。やっぱり神だったんだよ」

私は首を振って見せる。「神なんて嫌いよ。私は人が好き」

春樹が笑って見せた。「俺もだ」

「あなたお布団まで移動出来る？」

「さあ？」

「私、今日は疲れてるの。出来れば自分で移動してくれない？」

「大丈夫だと思うよ」彼はそう言って立ち上がる。そして、そっと布団の傍まで歩いて行った。

「大丈夫そうだ」そう言ってゴロンと布団に寝転ぶ。

「良かった。正巳を神座に引っ張り上げるのって、とっても大変だったんだから」私は文句を言いながら、彼に掛け布団を掛け、横に潜り込む。

「おやすみなさい」私はそう言って目を閉じる。あきらかに私の隣に居るのは春樹だった。私は安心して眠りに落ちた。

「おはよう。春樹起きて」私は春樹の名を呼んで起こす。

春樹は少し目を開けて言う。「やっぱりこいつ二日酔いだ」

「仕方ないわね。正巳に戻すわよ」

「ああ、そうしてくれ。死んでまで二日酔いの辛さは御免だ」

私は彼に口づけしてから言う。「春樹帰って」

そして今度は正巳を呼ぶ。「正巳。起きなさい」

正巳は布団の上を転がって掛け布団にしがみつく。

「頭痛い。もう少し寝させて下さいよ」

「自業自得って言うのよ。大体練習もしないであんなに飲むからよ」

「分かりました。分かったからもう少し小さな声で説教して下さい」

「しょうがないわね。でも、そのままにしてても治らないわよ」

「起きますよ。ところで僕役に立ったんですか？」

「ええ、とっても役に立ったわ。怖くなく眠れたもの」

「それだけですか？」

「ええ、そうよ。だからあなたは何も心配しないで」

「おかしいな？良い考えだと思ったんだけど・・・」

「ええ。とっても役に立ったって言ってるでしょう？どうも有り難う」

「そうですか？だったら良いけど。僕、部屋に戻ってから、お風呂に行つて来ます。汗をかいたら少しましになると思うから」

「それが良いわ。お水沢山飲んでおいてね」

「朝食の頃にはまた来ます」そう言って正巳は自分の部屋に戻った。

私も覚悟を決めて大浴場へ行く。中を覗くと初老の婦人が二人、上がろうとしているところだった。

私は急いで着ていたものを脱ぎ、タオルで首元から下を隠して浴室へ入った。浴室の方が脱衣場より暗いからだ。多分、痣には気づかれずに済んだはずだ。

二人が上がって、誰もいなくなった浴室で、湯船にのんびりと浸かる。手足を大きく伸ばし、ゆっくりと動かしてみる。どこにも不都合なところは無いようだ。多分、筋肉痛が出るとしたら明日。四十女の辛いところ。

部屋に戻ってタートルネックのTシャツを着、化粧をする。布団は既に片付けてあった。チェックインの時に告げた時間の十分前も仲居さんがやって来て食事の用意を始めた。

ちゃんと予定の時間に正巳もやって来た。

「あなた、とても時間に対してきちんとしてるのね」私は感心して言う。

「どうしてですか？当たり前でしょう？」

「あなたの梶さんはその当たり前の事が出来なかったの」

「梶さんは何をしてもみんなに許されたから。でも、僕はそうじゃない。だからちゃんとしないと」

「良い心掛けね。でも、自分にかけての制約を少し緩めないとこれから大変よ。人にも自分にも優しくしてね。きっと二日酔いもこれからは有るだろうし・・・」

「気をつけます。こんなに辛いと思わなかった」

「まだ頭痛い？」

「ええ、でも少しましになりました。多分運転は大丈夫です」

「良かった。でも、辛いようだったら私が代わるわ」

「恐怖で固まるんでしょう？」

「良く覚えてるわね」

「はい。それが昨夜の最後の記憶です」

「可哀相に」

「じゃあ、いただきます」正巳はそう言って食べ始めた。

「やっぱり若いわね。ちゃんと食べられるんだ」

「食べられる時に、食べないと」正巳はご飯をほお張ってそう言った。

私も朝からちゃんと食べられた。体調は良いみたいだ。

私達は食事の後すぐにチェックアウトして、またあの大きな橋を渡って帰った。

一人で華を見上げている。場所は八雲八重垣神社の境内。いつか春樹が充電のために座り込んでいた石に腰を下ろしている。結局私は独りで華の盛りの出雲へやって来た。

四国から帰り、元夫に出来事を話した。

「こんな事があったの」私が語り終えた。

「で、めぐみは結局五十嵐君と寝なかったの？」

「ええ、春樹が降りた正巳に添い寝して貰っただけ」

「そう」元夫は何か言いたい事があるのに言い出せないような感じで目を伏せた。

「何か言いたい事があるの？」私が尋ねる。

「実は、僕のガールフレンドに子供が出来たんだ」

元夫はそのガールフレンドとの関係を誠実に語った。つまり、去年の暮れ、私が春樹にかまけていた時に、寂しさを紛らわせるために付き合った同じ会社の女性と深い仲になり、子供が出来たと言う事らしい。そして彼女は結婚を望んでいると言う事だ。

「それであなたはどうしたいの？」私が尋ねた。

「彼女を傷つけない。僕は誰も傷つけないんだ」

とても彼らしい答えだ。

「そう。私はどうすれば良いのかしら？」私が言う。

「僕はめぐみを愛している。それは嘘じゃない」

答えになっていない。きっと混乱しているのだ。

「判ってるわ。あなたは本当に私を愛している。私もあなたを愛してる。でも、それはお互いの愛に対して関係のない事。あなたは多分、子供を持ち、普通の家庭を作る必要が在ったのよ。今まで楽しい時間を本当にありがとう」

私の頭の中に静寂が訪れた。

「何故そんな風に言うんだ」

彼はどんな答えを期待していたのだろうか。私の答えに何故か苛立っていた。

「だって、私は誰にも関われないのを知っているもの。あなたはあなたの道を歩き始めるのよ。私と一緒に歩く時間は、もう終わりって言う事。きっとそれだけの事なのよ」

「君はここから出て行くのかい？」気を取り直して彼が言った。

「いくら私でも、あなたの奥さんと子供を見ながら暮らす事なんて出来ないわ」

「僕はやっぱり梶君にかなわなかった」

「何故？」

そこで春樹の名前が出る事が私にとっては意外だった。

「めぐみは今平気な顔をしている」

彼は私を取り乱して泣く事を期待していたのだ。

「あなたには私の心の奥までいつも見通されているように思ってた。だから、いつも正直にすべて話したの。でも、思い違いだったのかも知れないわね。取り敢えず私、住むところを探すわ。見つかったらすぐに出て行く。食器類は全部処分して良いわ。きっと彼女が嫌だと思うから。私の部屋の物だけ持って行くから、その他の私の匂いのするものはすべて処分して」

私の精一杯の抵抗だった。

「判った。めぐみはそれで良いんだな」彼が念を押す。

「構わない。でも、私はあなたを愛してる。それはきっと変わらないわ」

それしか私には判らなかった。

「でも、それは僕とは関係ないって君は言うんだね」

「そう」知ってしまった限り知らんふりは出来ない。

「僕達に子供が居れば、こんな風にならなかったかな？」

「それはやり直せない事よ。私達は何も間違っていない。ただ、変化しただけよ。何も間違っていないし、これからだって何も間違わない。それで良いじゃない」

既に私達は離婚しているのだ。それも、私のせいで。他に何が言えるというのだ。

「僕はめぐみを失いたくないんだ・・・」

彼は迷っているのだろうか？

「あなたは何も失ったりしないわ」

迷っても結局自分の選んだ道を歩くのだ。

結局私は友人の不動産屋を頼って、一週間で部屋を見つけ、次の週には引っ越しをした。今までのオフィスも引き払い、少し広いマンションを借り、自宅兼オフィスと言う形で、市内だが少しだけ不便な所に移ったのだ。経費としては、広くなったが条件が悪いのでそんなに変わらない。

『春樹、やっぱり私は独りになっちゃった』

八重垣神社の華を見上げながら思った。

『辛いかな？』春樹が尋ねた。

『もちろん。寂しくって堪らないわ』

『何故泣かなかった？』

『泣いて癒すには辛すぎたのよ。寂しさを悲しみにすり替えず、寂しさは寂しさとして受け入れてみようと思ったの。それに、何も否定するべき事が無かったし。あなたと出会った時からこの道は決まっていたのよ。その準備の為に、いろんな事を学んだように思うわ。取り敢えず今は、この満開の桜にすべてを託そうと思ってる』

『そうか。それも一つのやり方だな。華が受け入れ、それごと散らしてくれるさ』

『そうね。それで良いのね』

人の気配を感じてふと目を上げると、にこにこ笑った男が目の前に立っていた。

「めぐみさん。こんなところでどうしたんですか？」正巳だった。

「ちょっと春樹と話してたのよ」私が言う。

「僕も梶さんに呼ばれました。めぐみさんを慰めろって」

「あの、おせっかい野郎・・・」

「どうかしたんですか？昨夜梶さんが夢に出て来て、絶対にここに行けって言ったんです。場所と時間指定までついてた。あんなに直接的なのは初めてでしたよ」

「そう。あいつなりに気を使ったんだ。でも、私は大丈夫よ。ちょっと辛いことがあったけど・・・でも、ちょうど良かった。あなた今夜私が泣くのに付き合ってくれる？」

「構いませんよ。そのつもりで来ましたから。だって、夢の中で泣いてるめぐみさんを抱き締めてたから」

「今まで我慢したかいがあったわ。私、二週間も泣くのを我慢したのよ」

「それは大変でしたね。でも、泣くのは今夜で良いんですよ。だったら、お昼のうちに桜を楽しみましょう」そう言って座っている私に手を差し伸べた。

「あなた、それ、とっても良い考えよ。じゃあ、行きましょうか」

私はそう言って彼の手を取って立ち上がり、彼の腕に手を回して歩き始めた。

『可愛い我が子』心の中でそう思った。

「めぐみさん。それは酷いです。せめて、恋人謙息子代理ぐらいでどうですか？」

「春樹は弟謙恋人代理だったのよ」私はそう言って笑った。

折からの風の花びらが舞った。